

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第255集

浦和市

下野田本村遺跡

埼玉高速鉄道建設事業関係埋蔵文化財発掘調査報告

1999

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



B区全景(北から)



第6号住居跡貼床断面

序

埼玉県では、「環境優先」「生活重視」「埼玉の新しいくづくり」を基本理念に、21世紀の豊かな彩の国を目指して、多彩なまちづくりを進めています。

浦和市、大宮市を中心とする地域では、本県の自立性を高めるべく首都機能を含めた高次都市機能の集積が図られ、さいたま新都心の整備が進められています。

一方、本県は、従来から東京と一体になった暮らしや活動の広がりが形づくられており、地域整備の基本的考え方の柱に東京との共存・連携が含まれています。

埼玉高速鉄道は、東京都北区から川口市、鳩ヶ谷市を経て浦和市に至る路線であります。この路線は、鉄道不便地域の解消や近接する鉄道の混雑緩和などを図るとともに、鉄道と一体的な地域整備により優良な宅地の供給や、高次都市機能の集積を促進するものとして建設されることになりました。

この建設に先立つ試掘調査によって、路線予定地内に埋蔵文化財の所在が新たに確認されました。そのうち下野田本村遺跡の取扱いについては、関係諸機関が慎重に協議を重ね、記録保存の措置が講じられることとなりました。当事業団では、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整に基づき、埼玉高速鉄道株式会

社の委託を受けて、発掘調査を実施いたしました。

その結果、縄文時代早・中期、弥生時代後期、平安時代の集落跡が発見されました。とりわけ弥生時代の集落跡は新しい知見です。今回の調査により、複数の時代にわたる遺跡の成り立ちが明らかにされるとともに、数々の貴重な資料を得ることができました。

本書は、これらの成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及啓発の参考資料として、広く活用していただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査から報告書刊行に至るまで諸調整にご尽力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、埼玉県総合政策部交通政策課、埼玉高速鉄道株式会社、浦和市教育委員会、並びに地元関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成11年7月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例言

1. 本書は、埼玉県浦和市に所在する下野田本村遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番および発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

下野田本村遺跡（SMNDHMR）
浦和市大字下野田字宿畑489番地1他
平成10年10月2日付け教文第2-113号
3. 発掘調査は、埼玉高速鉄道建設事業にともなう事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉高速鉄道株式会社の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第I章の組織により実施した。本事業のうち発掘調査については、昼間孝志、中山浩彦が担当し、平成10年10月1日から平成10年11月30日まで実施した。整理報告書作成事業は、石坂俊郎が担当し、平成11年4月1日から平成11年7月31日まで実施した。
5. 遺跡の基準点測量は、中央航業株式会社に委託した。
6. 発掘調査における写真撮影は、昼間と中山が行い、遺物写真撮影は、大屋道則が行った。
7. 出土品の整理および図版の作成は石坂が行い、縄文時代の遺物については新屋雅明が補助した。本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、IV-1のうち、遺物に関する記述を新屋が行い、その他は石坂が行った。
8. 本書の編集は、石坂があたった。
9. 本書にかかる資料は、平成12年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。
10. 本書の作成にあたり、小倉均氏からは、周辺遺跡の状況について御教示をいただいた。また、墨書土器の文字解釈については宮瀧交二氏に御協力いただいた。記して謝意を表するものである。

凡例

1. 挿図中のX、Yによる座標表示は、国家標準直角座標第IX系に基づく座標値である。方位は、全て座標北を指す。
2. グリッドは、国家標準直角座標に基づいて設定し、10×10m方眼である。グリッドの名称は、方眼の北西隅の杭番号である。
3. 遺構の表記記号は次のとおりである。
S J…住居跡 S P…炉跡 S D…溝跡
S K…土塋 S X…不明遺構 P…ピット
4. 土塋の一部は、調査時と報告書作成時とで遺構番号が異なっている。炉跡と欠番を除いて整理した結果だが、該当するものについては、IV-4(2)において、新番号のあとに(旧SKO)の表記で旧番号を併記した。
5. 挿図の縮尺は、遺構図1/60、遺物図1/3を基本とするが、小型の遺物については、1/2で掲載したものもある。
6. 遺構断面図における水準の数値は、すべて海拔標高である。
7. 挿図中のスクリーントーンは、以下の各事項を表す。
 地山  貼床
 燃烧面
8. 土器実測図は、全周に対し1/8周以上遺存する場合を対象に径を推定し、復元的な反転図化を行った。
9. 遺物観察表の計測値は、()内が推定値、単位はcmである。残存率の単位は%である。
10. 遺物観察表における遺物の色調は、新版標準土色帳(農林水産省農林水産技術会議事務局監修1994年版)に準じた。
11. 第3図作成にあたっては、以下の地図を使用した。
国土地理院1/25000地形図「浦和」・「越谷」

目次

口絵

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	(1) 住居跡	16
1. 調査に至るまでの経過	1	(2) 遺構外出土の遺物	30
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	3. 平安時代	31
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	3	(1) 住居跡	31
II 遺跡の立地と環境	4	(2) 遺構外出土の遺物	32
III 遺跡の概要	8	4. その他	33
IV 遺構と遺物	11	(1) 溝跡	33
1. 縄文時代	11	(2) 土壙	34
(1) 住居跡	11	(3) 不明遺構	38
(2) 炉跡、土壙	13	(4) 遺構外ピット	38
(3) 遺構外出土の遺物	15	V 調査の成果	39
2. 弥生時代	16		

挿 図 目 次

第1図	調査範囲区割図	2	第18図	第6号住居跡出土遺物	25
第2図	埼玉県の地形	4	第19図	第8号住居跡	26
第3図	周辺の遺跡	6	第20図	第9号住居跡出土遺物	26
第4図	遺跡の範囲と調査の範囲	9	第21図	第9号住居跡	27
第5図	調査範囲の全体図	10	第22図	第10・11号住居跡	28
第6図	第1号住居跡	12	第23図	第10号住居跡出土遺物	29
第7図	第1号住居跡出土遺物	13	第24図	遺構外出土土器	30
第8図	炉跡・土壇と出土遺物	14	第25図	第12号住居跡出土遺物	31
第9図	遺構外出土土器	15	第26図	遺構外出土土器	32
第10図	第2号住居跡出土遺物	16	第27図	第1号溝跡	33
第11図	第2号住居跡	17	第28図	土壇出土遺物	35
第12図	第3号住居跡	18	第29図	土壇(1)	36
第13図	第3号住居跡出土遺物	19	第30図	土壇(2)	37
第14図	第4号住居跡と出土遺物	20	第31図	不明遺構	38
第15図	第5・7・12号住居跡	22	第32図	遺構外ピット	38
第16図	第5号住居跡出土遺物	23	第33図	上野田西台遺跡の住居配列	41
第17図	第6号住居跡	24			

図版目次

- 図版1 B区全景(北から)
C区全景(北から)
- 図版2 第1号住居跡
第2号住居跡
第3号住居跡
- 図版3 第4号住居跡
第5号住居跡
第6号住居跡
- 図版4 第8号住居跡
第9号住居跡
第10・11号住居跡
- 図版5 第5・7・12号住居跡
第1・2・3号土壇
第4号土壇
- 図版6 第5号土壇
第6号土壇
第7号土壇
- 図版7 第8・10号土壇
第9号土壇
第11号土壇
- 図版8 第17号土壇・第1号溝跡
第18・19・20・21号土壇
第22号土壇
- 図版9 第3号住居跡(第13図)-4
第3号住居跡(第13図)-5
第5号住居跡(第16図)-6
- 第6号住居跡(第18図)-2
第6号住居跡(第18図)-3
第6号住居跡(第18図)-5
- 図版10 第10号住居跡(第23図)-1
第10号住居跡(第23図)-2
第10号住居跡(第23図)-4
第10号住居跡(第23図)-3
遺構外出土弥生土器(第24図)-2
第12号住居跡(第25図)-1
- 図版11 第12号住居跡(第25図)-2
第12号住居跡(第25図)-3
第12号住居跡(第25図)-4
第12号住居跡(第25図)-4
第12号住居跡(第25図)-4
遺構外出土土師器(第26図)-3
- 図版12 第1号住居跡出土遺物(第7図)
第1号炉跡・遺構外出土縄文土器(第8・9図)
- 図版13 第2・3号住居跡出土遺物(第10・13図)
第4号住居跡出土遺物(第14図)
- 図版14 第5号住居跡出土遺物(第16図)
第6号住居跡出土遺物(第18図)
- 図版15 第9・10号住居跡出土遺物(第20・23図)
第12号住居跡出土遺物(第25図)
- 図版16 土壇・遺構外出土遺物(第24・26・28図)
第12号住居跡出土遺物(第25図)-9

I 発掘調査の概要

1. 調査に至るまでの経過

埼玉県では、「快適でうるおいのある生活空間の形成」を目指して多様な交通機関を有機的に連携し、県内どこでも便利な交通サービスが受けられる交通体系の実現に向け整備を進めている。

埼玉高速鉄道は、21世紀に向けて豊かな県民生活向上のために、快適な通勤・通学の実現と鉄道不便地の解消及び沿線地域の均衡ある発展を図ることを目的として建設が進められている。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課では、このような政策の推進に伴う文化財の保護について、従前より関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

埼玉高速鉄道に係る埋蔵文化財の所在および取扱については、平成10年5月26日付け交政第160号で、埼玉県総合政策部交通政策課長より埼玉県教育委員会教育長あて照会があった。

文化財保護課では確認調査を実施し、その結果をもとに、平成10年6月17日付け教文第379号で、下野田本村遺跡の取扱について次のように回答した。

1 埋蔵文化財の所在

名称	種別	時代	所在地
下野田本村遺跡 (No.01-122)	集落跡	縄文 弥生 平安	浦和市大字 下野田字本 村

2 取り扱いについて

上記の埋蔵文化財包蔵地は、現状保存するのが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状を変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づく文化庁長官あての発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。

発掘調査については、実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と交通政策課と文化財保護課の三者により調査方法、期間、経費などの問題を中心に協議が行われた。その結果、平成10年10月1日から平成10年11月30日までの期間で、実施することになった。

文化財保護法第57条の2の規定による埋蔵文化財発掘届が埼玉高速鉄道株式会社から提出され、第57条1項の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。

発掘調査に係る通知は以下のとおりである。

下野田本村遺跡 平成10年10月2日付け教文第2-113号

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

下野田本村遺跡の発掘調査は、平成10年10月1日から平成10年11月30日まで実施した。最終的な調査面積は、690㎡である。

調査地点は、道路を挟んで4ヶ所に分かれており、さらに調査手順に関連して、全体をA～G区までの7区に分割した。

10月上旬、現場事務所と囲柵を設置し、まずA・B・C区について、表土掘削と遺構確認に着手した。

10月中旬、確認された遺構から検出を開始し、並行して基準点測量を実施した。

10月下旬から11月上旬にかけて、検出した遺構について、順次、精査、測量、写真撮影等を行い、まずA・B・C区の調査を終了した。

引き続きD・E・F・G区の調査に着手し、確認された遺構について、順次、精査・記録作業を行った。

11月中旬、発掘・記録作業を終了した。現場事務所の撤収と器材の搬出を完了し、11月末日をもって調査を終了した。

整理・報告書刊行

整理事業は、平成11年4月1日から平成11年7月31日まで実施した。

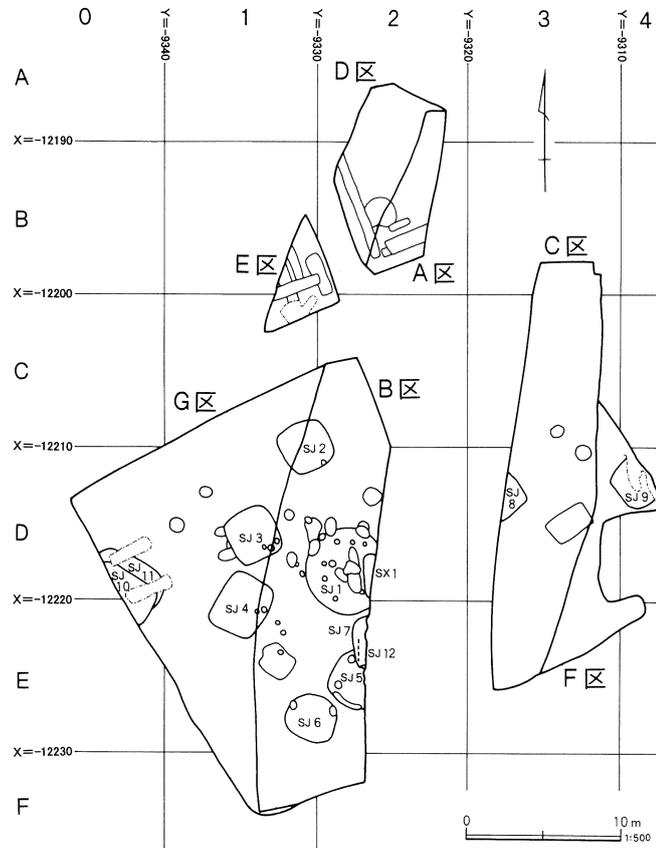
4月上旬から遺物の水洗と注記、遺構図面の整理を開始した。遺物については、水洗と注記の終了後、接合・復原し、実測を行った。遺構図面は、整理できたものからトレースを開始した。

5月上旬以後、遺構・遺物図面のトレースに並行して遺構・遺物図版の版組みを行うとともに、割付け、原稿執筆に着手した。

5月中旬、遺物写真撮影を行った。

6月からは校正を行い、7月末に本書を刊行した。

第1図 調査範囲区割図



3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査 (平成10年度)

理事長 荒井 桂
副理事長 飯塚 誠一郎
常務理事兼管理部長 鈴木 進

管理部

専門調査員兼経理課長 関野 栄一
主任 江田 和美
主任 福田 昭美
主任 菊池 久
庶務課長 金子 隆
主任 田中 裕二
主任 長滝 美智子
主任 腰塚 雄二

調査部

調査部長 谷井 彪
調査部副部長 水村 孝行
調査第四課長 鈴木 秀雄
統括調査員 昼間 孝志
調査員 中山 浩彦

(2) 整理・報告書刊行 (平成11年度)

理事長 荒井 桂
副理事長 飯塚 誠一郎
常務理事兼管理部長 広木 卓

管理部

管理部副部長兼経理課長 関野 栄一
主任 福田 昭美
主任 腰塚 雄二
主任 菊池 久
庶務課長 金子 隆
主任 田中 裕二
主任 江田 和美
主任 長滝 美智子

資料部

資料部長 高橋 一夫
専門調査員兼資料部副部長 石岡 憲雄
専門調査員 市川 修
主任調査員 石坂 俊郎

II 遺跡の立地と環境

下野田本村遺跡は、埼玉県東部にあたる大宮台地鳩ヶ谷支台東縁上にある。東600mには綾瀬川が南流し、さらに東一帯には中川低地が開けている。

比較的低平な大宮台地は、中小河川による開析が発達し、幅広な低地の嵌入によって、複数の支台に分割される。西縁が面する荒川から東へ横断してみると、鴨川までが指扇支台、鴻沼川までが日進与野支台、芝川までが浦和支台、見沼代用水東縁までが大和田片柳支台、そして綾瀬川に面し、もっとも東にあたるのが鳩ヶ谷支台である。各支台はさらに細かに開析され、いわば樹枝状の地形となっている。

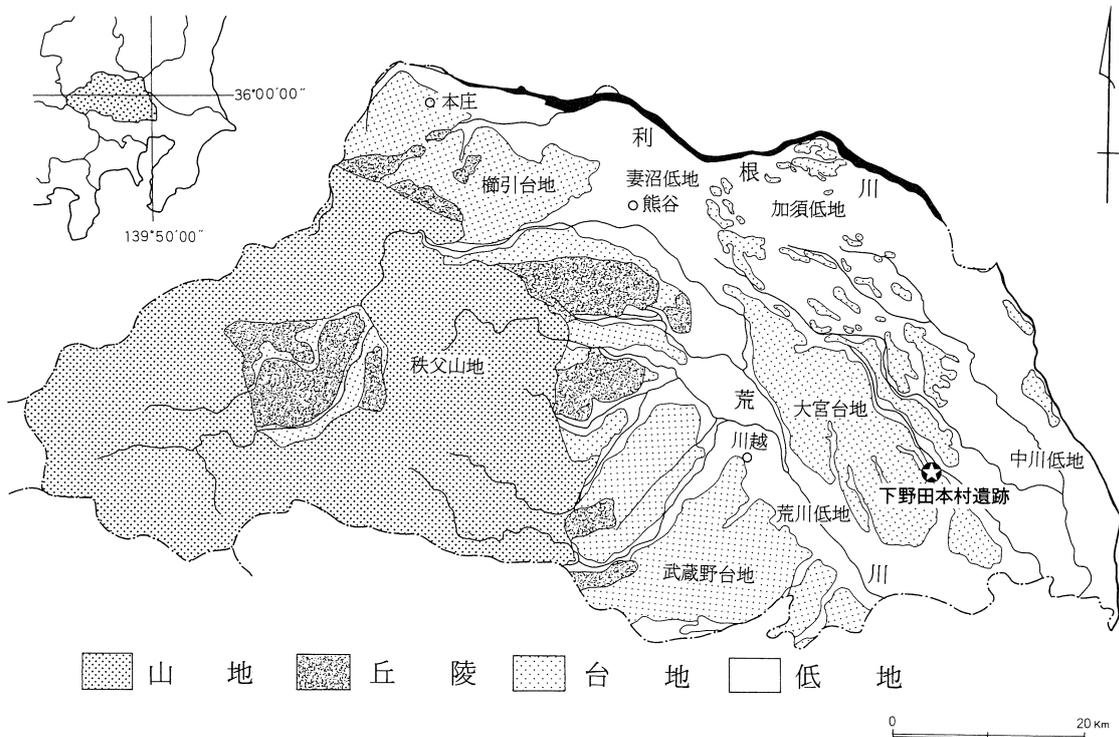
浦和・大宮・与野市の市街が展開する台地上は都市化が進み、本来の遺跡分布がわかりにくくなっているが、支台縁部を中心に各時代にわたる遺跡の所在が確認されている。

ここでは、下野田本村遺跡の調査成果に関連し、縄文時代中期～後期初頭、弥生時代、平安時代の遺跡に

視野を限り、状況を概観する。

縄文時代中期の大宮台地は、遺跡数の増加がみられるが、大規模集落の出現は顕著でなく、集落規模は小さいものが多いようだ。規模が大きく例外的存在として知られるのは、浦和支台東部の馬場小室山遺跡(44)である。また、同遺跡の西1kmに位置する大古里遺跡(56)も、部分的な調査であるが密な遺構分布が確認されており、大規模集落遺跡である可能性がある。また、原山坊ノ在家遺跡(53)でも、10軒の住居跡が検出されている。その他、発掘調査によって集落の存在が確認された遺跡として、浦和支台では、大宮公園内遺跡(1)、大間木会ノ谷遺跡(34)、大間木内谷遺跡(36)、大北遺跡(37)、宮本遺跡(42)、芝原遺跡(46)、水深遺跡(47)、中尾中丸遺跡(48)、駒形南遺跡(49)、不動谷遺跡(52)、諏訪入遺跡(58)、本太三丁目遺跡(61)、本杣遺跡(72)、上木崎足立遺跡(74)、B-7号遺跡(76)などがある。また、大古里遺跡に近い低地に位置する大道東遺跡(55)では丸木舟が出土しており、

第2図 埼玉県の地形



台地上の集落との関連が注目される。周辺支台では、対岸の大和田片柳支台にA-69号遺跡(3)、A-64号遺跡(6)、御蔵山中遺跡(10)、鎌倉公園遺跡(13)、三崎台遺跡(20)、日進与野支台に札ノ辻遺跡(71)、鳩ヶ谷支台に木曾呂表遺跡(28)等がある。

下野田本村遺跡では発見されていないが、弥生時代後期に先立つ中期宮ノ台式期の遺跡についても瞥見しておく。大宮台地上では、今のところ大規模な該期集落は確認されておらず、比較的小規模な集落遺跡が点在する状況にある。この点は、大規模環濠集落が台地縁部に多数展開する東京湾岸周辺地域とは対照的である。

綾瀬川右岸には、竪穴住居跡16軒が検出された上野田西台遺跡(19)、谷ノ前遺跡(21)、さらに下流に面して戸塚上台遺跡(25)がある。芝川右岸には、浦和市松木遺跡(45)、大宮市域にあたる同左岸には、上流部から大和田本村遺跡、環濠と竪穴住居跡8軒が検出された大和田本村北遺跡、A-165号遺跡、やはり環濠と竪穴住居跡5軒が検出された御蔵山中遺跡があり、同遺跡周辺には、南中丸遺跡(5)、海老沼遺跡(7)、南中野遺跡(8)、御蔵台遺跡(9)が集中的に分布しており注目される。荒川低地に直面する台地南縁部では、西から与野市諏訪坂遺跡、円正寺遺跡(41)、明花向遺跡(40)、大北遺跡、西谷遺跡(35)、吉場遺跡(31)が並ぶ。

弥生時代後期の遺跡は、後半期から終末期を中心として、台地上に多数確認されている。分布は、宮の台式期に引き続き、低地に面する台地縁部が主だが、浦和市前耕地遺跡(78)、前島遺跡(79)などのように、支谷内奥に立地する遺跡も確認されている。市街化が進んだ地域における調査の進展によって、台地内陸部における遺跡分布が、今後密度を増す可能性は残されている。

遺跡の規模と分布の集中で注目されるのは、台地西部の鴻沼低地沿岸と、荒川・芝川両低地に面する浦和支台南東部である。前者では、共に環濠集落である中里前原遺跡(69)と中里前原北遺跡(70)、中里前原遺跡の墓域である上太寺遺跡(68)が南北に並び、鴻沼川対岸の札之辻遺跡は、やはり大規模な継続的集落である。さら

に上流域では、方形周溝墓群が発見された関東遺跡(77)、下流域では、環濠集落である矢垂遺跡(73)、本空遺跡、住居跡46軒が検出された須黒神社遺跡(67)等が分布している。

一方後者では、大宮台地地域最大級の環濠集落である井沼方遺跡(38)が拠点的存在である。これまで10数次にわたる発掘調査により、環濠集落と墓域からなる大規模な集落構成が明らかにされつつある。周辺では、南に隣接して井沼方南遺跡(39)、北部一帯には、宮ノ台式期の集落分布と重なるように大北遺跡、吉場遺跡、和田南遺跡(30)、宮前遺跡(32)、西谷遺跡がある。

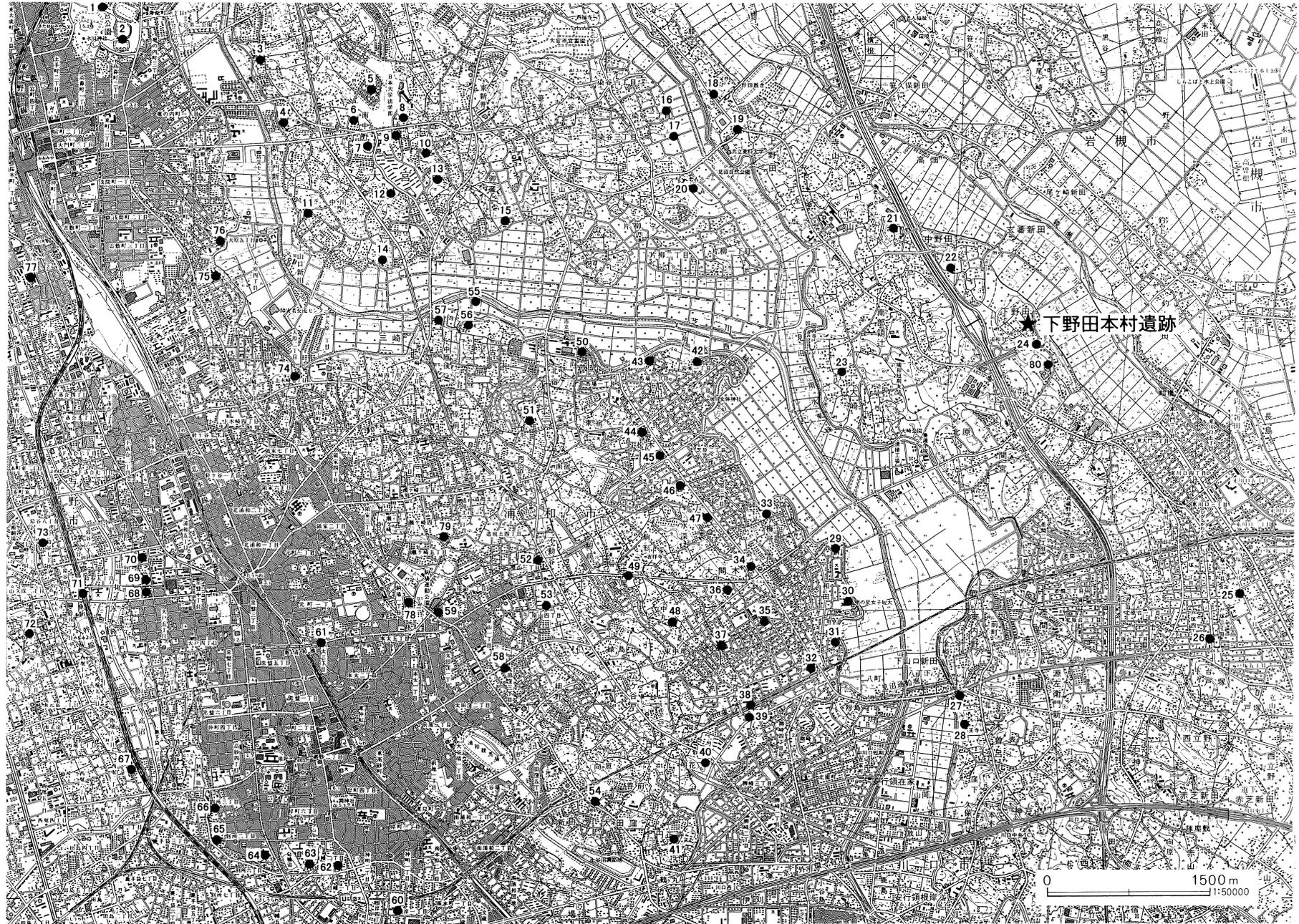
両拠点地域の間にあたる台地南縁部には、西から別所子野上遺跡(66)、別所西野遺跡(65)、別所遺跡(64)、白幡本宿遺跡(63)、白幡上ノ台遺跡(62)、根岸遺跡(60)、小松原高校校地、善前南遺跡(54)、円正寺遺跡、明花向遺跡が1km前後の間隔で分布している。

芝川低地沿岸では、前述した井沼方遺跡を中心とする遺跡群の北にも遺跡分布の広がりが認められる。中心的存在は、馬場北遺跡(43)と北宿遺跡(50)である。共に環濠集落で、規模は中里前原遺跡や井沼方遺跡に比べ小さいが、谷を挟んで近接する状況は注目される。その南一帯に大古里遺跡、北宿西遺跡(51)、馬場小室山遺跡、松木遺跡、芝原遺跡、梅所遺跡(33)があり、1kmを隔てない連鎖を形成している。

さらに上流右岸の北袋遺跡(75)では、30軒の竪穴住居跡が検出された。遺構の重複が顕著で、後期終末から古墳時代初頭の継続的集落として注目される。谷を挟んで、ほぼ同時期のB-7号遺跡が隣接する。芝川対岸には、中川八幡遺跡(11)、A-61号遺跡(12)、鎌倉公園遺跡、稲荷山遺跡(14)、篠山遺跡(15)等がある。B-7号遺跡の北約2kmの右岸台地上には大宮公園内遺跡があり、後期の遺跡の連なりは、これより北では希薄である。

下野田本村遺跡が所在する鳩ヶ谷支台上は、これまで見てきた状況に比べると、遺跡分布は、現状ではむしろ希薄である。支台北半では、上野田西台遺跡、上野田膝子遺跡(18)、中原遺跡(22)、大崎北久保遺跡(23)が点

第3図 周辺の遺跡



在し、そして下野田本村遺跡の南には下野田稻荷原遺跡(24)が隣接する。上野田西台遺跡の対岸である大和田片柳支台東縁には、染谷遺跡群A-20号遺跡(16)、A-178号遺跡(17)、三崎台遺跡があり、一帯では、後期後半～古墳時代初頭にかけて、集落が連続的に営まれた状況が認められる。

概ね川口市域となる支台南半では、遺跡の分布はさらに希薄なようだ。七郷神社裏遺跡(26)、東本郷遺跡、芝川に面する木曾呂遺跡(27)等で後期後半の集落が発見されている。

平安時代の遺跡は、台地上の各地で集落などが確認されているが、大規模な例は少ない。

住居跡が検出された遺跡として、芝川右岸浦和支台縁部に上木崎足立遺跡、中原後遺跡(57)、大古里遺跡、北宿遺跡、和田北遺跡(29)、大間木内谷遺跡、内陸部に原山東原遺跡(59)、同左岸大和田片柳支台上にA-64号遺跡などがある。台地上の集落で注目されるのは、これらのうちで芝川流域最奥にあたる氷川神社東遺跡(2)

である。41軒の竪穴住居跡と42棟の掘立柱建物跡が検出され、口琴の出土が話題になった。仏教的色彩の濃い遺物群が、遺跡の性格を示唆している。今後、周辺の状況が明らかになるにつれ、その存在はより際立ってくると思われる。

鳩ヶ谷支台では、下野田本村遺跡の南に東裏遺跡(80)がある。

平安時代の遺跡で注目されるのは、土器焼成遺構である。東北原遺跡、御蔵山中遺跡、和田北遺跡で確認されている。その成立には、下総等、東に接する地方からの影響がかかわったとみられる。大宮台地の地理的特性を示す事象といえよう。

ところで、台地上から西へ視点を移すと、奈良時代に遡り活発な展開を際立たせているのは、鴨川流域に形成された自然堤防上の遺跡である。大久保領家廃寺、大久保条里遺跡等、それらは、集落のみならず、多岐にわたる問題を提起している。

個々の遺跡についての文献目録は、掲載を省略する。なお、浦和市域の遺跡全般については以下の文献(1)、同じく弥生時代の遺跡については同(2)で、調査成果の蓄積とあらましを知ることができる。

(1) 浦和市総務部市史編纂室1991『浦和市史考古資料編』続編

(2) 浦和市遺跡調査会1991『円正寺遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書 第140集

Ⅲ 遺跡の概要

下野田本村遺跡は、浦和市大字下野田字宿畑489番地1他に所在する。市域の東辺に近く、浦和駅から東北東へ約7kmの位置である。遺跡周辺は、緑地、農地が主体をなす景観である。道路は細く、かつ緩やかに蛇行し、自動車が往来の主となる以前の風景を偲ばせている。

一方、遺跡の西隣は東北自動車道路浦和インターチェンジであり、目下その拡張が進められている。南では、建設途上にある国道463号線が、台地を横断しようとしている。そして東に接しては、今回の発掘調査の契機となった埼玉高速鉄道の建設が進められており、各種の道路、鉄道が、遺跡を取り囲みつつある状況である。

自然地理的にみると、遺跡の立地は、大宮台地鳩ヶ谷支台北部の東縁上である。東600mに綾瀬川が南流し、さらに遠方にかけて中川低地が開けている。台地上の標高は10m余りで、東西に狭く、周囲の低地と複雑に入り組んでいる。詳細に見ると、遺跡は、東・北・西の三方を低地に取り巻かれた、いわば半島状の地形上にある。南には、今回、同時期に発掘調査された下野田稲荷原遺跡が接している。遺跡の標高は9～14m、西から東へ緩く傾斜している。周辺低地の標高は5m前後であり、遺跡との比高差は、5～9mである。発掘調査地点は、遺跡範囲の南東隅にあたり、台地の東縁に接している。東縁の傾斜は緩やかで、調査地点付近に立つと、低地との比高差はあまり感じられない。

遺跡が発掘調査されたのは初めてで、今回が第1次調査となる。その結果、遺構の分布は比較的密度が高く、縄文時代、弥生時代、平安時代の竪穴住居跡などの遺構が検出された。遺構ごとの詳説は次章Ⅳで行うが、まず遺構分布の概要を中心に、調査成果の概要を見ておきたい。

検出された遺構の内訳は、縄文時代早期の炉跡2基、

同中期の竪穴住居跡2軒、中期以前の土壙3基、弥生時代後期の竪穴住居跡9軒、平安時代の竪穴住居跡1軒、その他、溝1条、土壙19基、不明遺構1基、ピット4基は、近世以降が主体とみられる。

縄文時代早期の炉跡SP1・2は、同中期の竪穴住居跡SJ1の床下で検出された。炉跡の北側には、住居跡に先行する土壙SK7・8・10がある。土壙が早期に遡るとは断定できないが、中期以前の遺構がD-2グリッドに集中する状況は指摘できる。

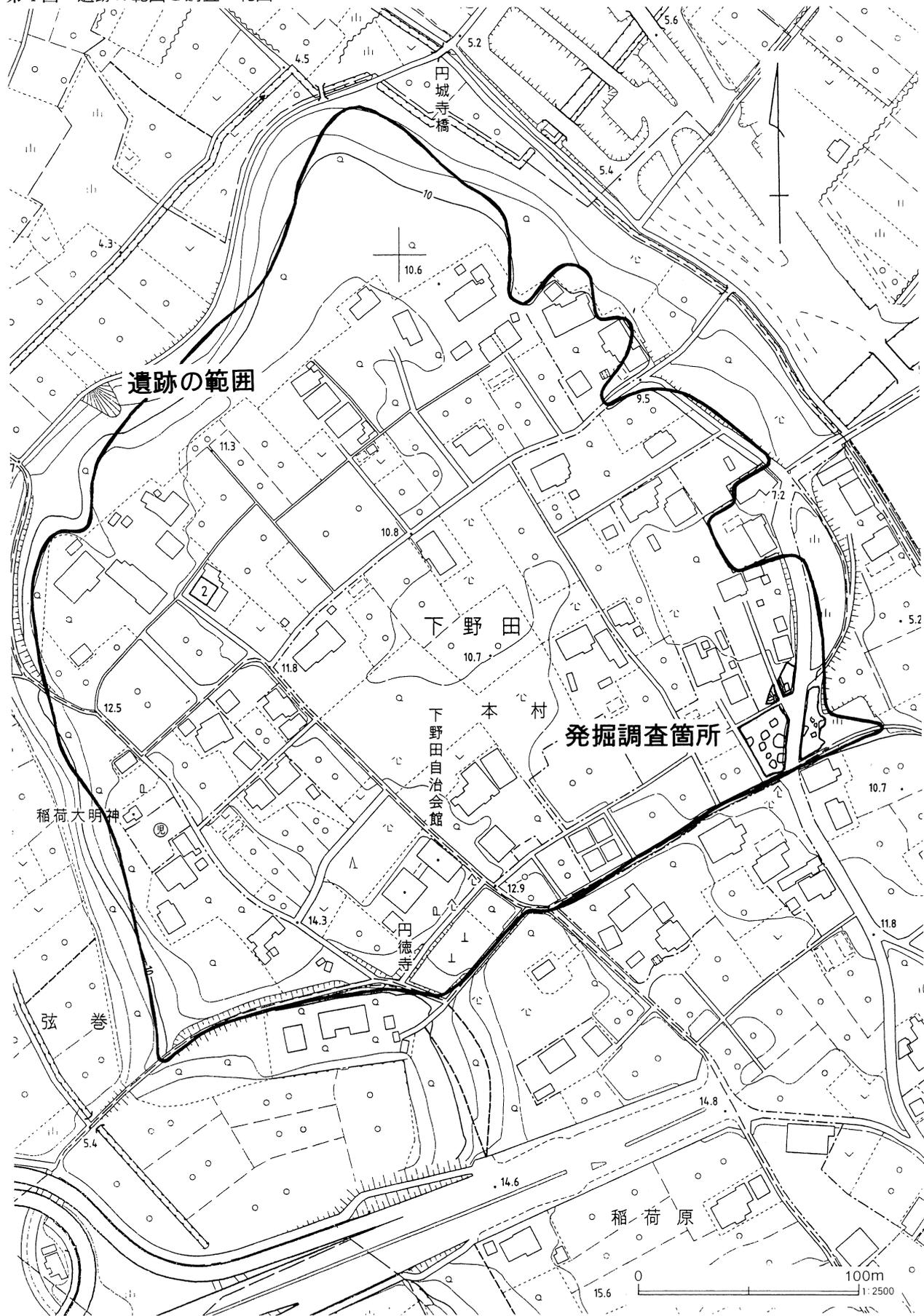
縄文時代中期の竪穴住居跡SJ1・11は、10m隔たってほぼ東西に並ぶ。確認されたのはこの2軒だが、弥生時代の住居跡であるSJ5の覆土には、やはり縄文時代中期の土器片が多く含まれていた。付近に、該期の遺構がさらに所在する可能性がある。

数量的に成果の主体となるのは、弥生時代後期の竪穴住居跡群である。調査範囲の北半と西縁部は分布が希薄で、主体は遺跡範囲の南限に寄っている。南東に開口する半円状の配列を示しているが、その内にも遺構の重複・近接が含まれており、時間的に前後する複数の集落単位が含まれている。個々の遺構規模に際違った差はみられない。

平安時代の遺構は、弥生時代の住居跡に重複する竪穴住居跡SJ12である。SK11もその可能性がある。分布は、やはり調査範囲の南半に偏っている。強いて集落の展開を想定するなら南一帯にかけてだろうが、平安時代の住居跡では、孤立的分布の事例もしばしば認められる点も注意を要する。

土壙群は、これまで触れられたものを除くと帰属時期不明である。概ね近世以降に降るものと推定される。調査範囲南半に円形土壙が散在し、北半に長方形土壙が集中的に分布している。後者は、溝SD1を含め、指向する方位が相互に平行もしくは直行しており、相互に関連が認められる。

第4図 遺跡の範囲と調査の範囲



第5図 調査範囲の全体図



IV 遺構と遺物

1. 縄文時代

(1) 住居跡

第1号住居跡<SJ1> (第6・7図)

位置は、D-1・D-2・E-2グリッドである。

SP1・2、SK7・8・10を壊し、またSX1に壊されている。

東辺部が調査範囲外にあたるため平面規模は確定できないが、径5.8m、平面形は概ね円形である。壁は、最高0.1m、一部消失しており、遺存状態はあまりよくない。

床面上のピットは9箇所確認された。一部例外もあるが、基本的に壁から0.5~0.8mの距離を保って配列されており、それらの多くが柱穴とみられる。

炉は、床面ほぼ中央に設置されており、地床炉である。平面形は1.0×0.5mの略楕円形で、深さ0.2mである。

床面直上を残して覆土の大部分が消失していたこともあってか、出土遺物は少なく、縄文土器の小破片が主体である。

いずれも中期後葉の加曽利E式土器である。

1~7は口縁部の破片である。

1~3はキャリパー形深鉢形土器の口縁部である。1は隆帯により口縁部区画文を施す。2は沈線と単節RLの縄文を施す。3は沈線と隆帯によって口縁部区画文を施す。縄文は単節RLである。

4~6は口縁部に沈線を巡らせる。4は口縁部の3条沈線下に懸垂文を施す。5は口縁部がやや強く内湾する。6は口縁部に一条の沈線を巡らせ、縦位の沈線条線を施す。

7は胴部で緩く括れる形態の深鉢形土器である。口縁部に2列に円文を施す。体部に条線を施す。

8はキャリパー形深鉢形土器の頸部付近の破片である。隆帯を施す。単節LRの縄文を施す。

9~17は懸垂文を施した深鉢形土器の胴部破片で

ある。9、11~15は単節RLの縄文、10は無節Lの縄文、16、17は縦位の条線を施す。

18~20は無文の浅鉢形土器である。18、19はごく緩く丸みを帯びて口縁部へと移行する形態である。同一個体であろう。20は口縁部が肥厚する形態である。

21は有孔鍔付土器の一種であろう。通常、鍔の部分に有孔が施されるが、現存する部位には孔が認められない。口縁部は直立気味に立ち上がり、隆帯以下はやや丸みを帯びて体部へと移行している。器高の低い鉢形の形態であろう。内外面ともに丹念にミガキによる調整がなされている。

遺構の帰属時期は、以上の遺物と同じく、縄文時代中期後葉である。

第11号住居跡<SJ11> (第22図)

位置は、D・E-0グリッドである。

SJ10に大部分壊され、また一部が調査範囲外にあたるため、平面規模は不明である。平面形は、径5m前後の楕円形に近いと推定される。壁は、最高0.4mである。

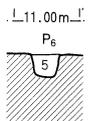
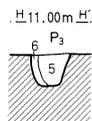
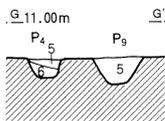
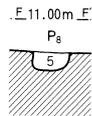
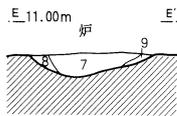
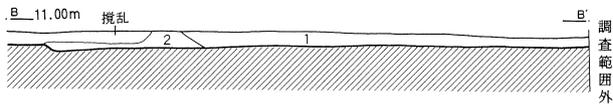
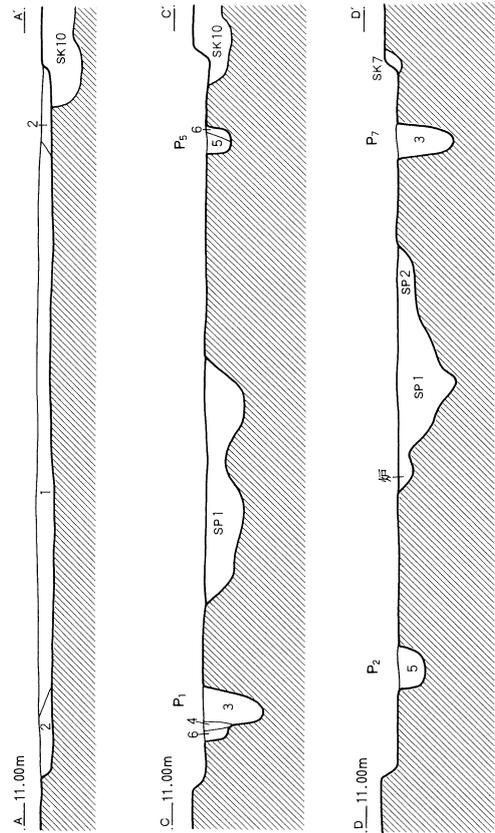
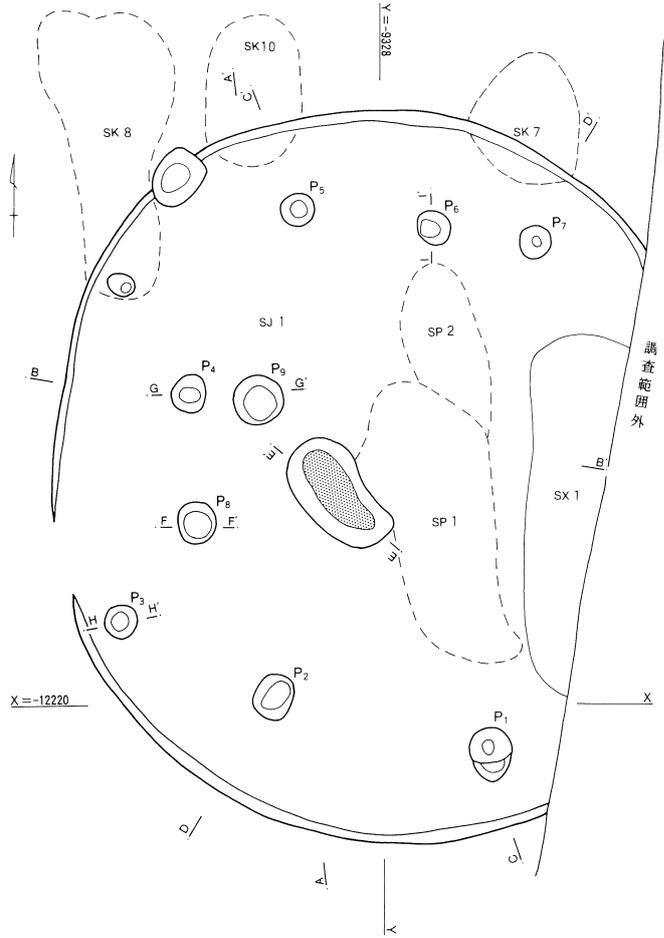
柱穴等、住居内のピットは、SJ10と重複するP3がそれにあるとみられる。

炉跡は、確認されなかった。SJ10に壊された可能性が高い。

出土遺物は、縄文土器の小片10数点である。型式の特定はいずれも難しい。一方、SJ10覆土に混入した縄文土器には、加曽利E式土器とみられる小片が含まれている。それらは、本来SJ11の遺物である可能性が高い。

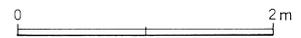
このことから、SJ11の帰属時期は、SJ1と同様、縄文時代中期後葉と推定される。

第6図 第1号住居跡

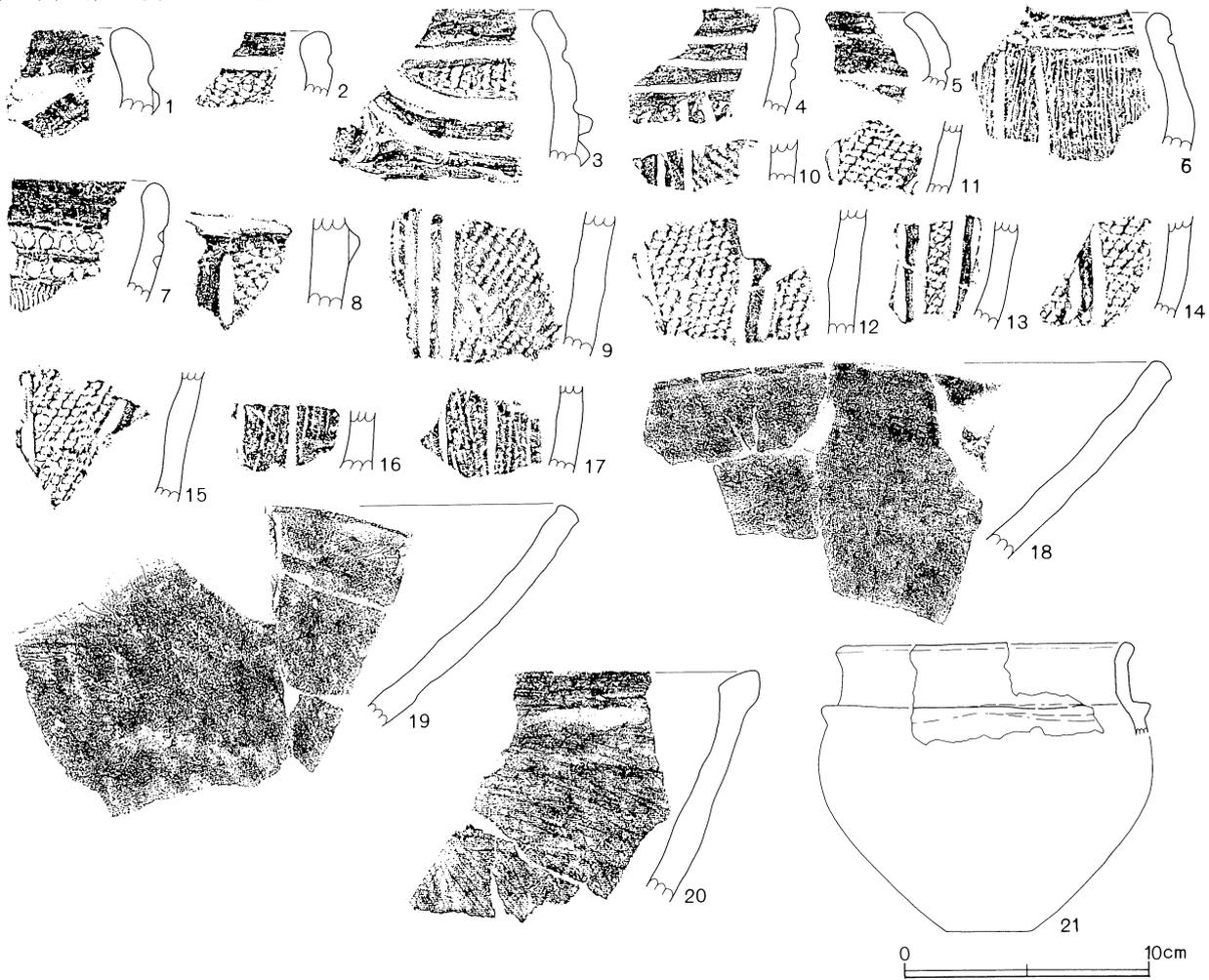


S J 1

- 1 黒褐色土：ローム粒、炭化物粒、焼土粒を少量含む
- 2 黄褐色土：ローム主体。地山崩落土
- 3 暗褐色土：ローム粒を少量含む
- 4 暗褐色土：ロームブロック（φ10mm）を少量含む
- 5 暗褐色土：ローム粒を少量含む
- 6 褐色土：ロームブロック（φ10mm）を少量含む
- 7 暗褐色土：焼土粒多量、焼土ブロック（φ10mm）を少量含む
- 8 暗褐色土：焼土粒を多量に含み、土器片混入
- 9 暗褐色土：ローム粒、焼土粒を少量含む



第7図 第1号住居跡出土遺物



(2) 炉跡、土壇

第1号炉跡<SP 1> (第8図)

位置は、D-2グリッドである。SP 2を壊し、共にS J 1に壊されている。

平面形は1.4×0.8mの不整な長楕円形で、深さ0.3mである。北寄りが径1.0mのすり鉢状に窪み、深さ0.5mである。窪みの底部には焼土粒が集中していた。これらの状況から、この遺構は炉跡と判断される。

遺物は、縄文土器小片がわずかである。

1は深鉢形土器の胴部破片である。波状沈線によって区画し、沈線間に縦位の沈線を施す。波状沈線は縦位の沈線に比べて幅が広く、浅い。外面には擦痕が調整痕として僅かに認められる。繊維を含まない。褐色

を呈する。早期中葉の沈線文系土器である。

遺構の帰属時期は、以上の遺物と同じく、縄文時代早期中葉とみておきたい。

第2号炉跡<SP 2> (第8図)

位置は、D-2グリッドである。S J 1、SP 1に壊されている。

平面形は1.1×0.6mの楕円形で、深さ0.2mである。北半がやや浅くなる。形状からみて、SP 1と同じく炉跡と推定される。

遺物はないが、帰属時期はSP 1の直前と推定される。

第7号土壇<SK 7 (旧 SK 9)> (第8図)

位置は、D-2グリッドである。SJ 1に壊されている。

平面形は1.0×0.9mの略楕円形で、深さは南半0.35m、北半0.15m。南北で段差があるが、土層断面図によれば、遺構の重複によるものではないようだ。

遺物はないが、SJ 1に先行することから、遺構の帰属時期は、縄文時代中期以前である。

0.15m、南側の掘り込み0.25mである。

遺物は、縄文土器の小片1点である。SJ 1に先行することから、遺構の帰属時期は、縄文時代中期以前である。

第10号土壇<SK10 (旧 SK12)> (第8図)

位置は、D-2グリッドである。SJ 1に壊されている。

平面形は1.2×0.7mの楕円形とみられ、深さ0.3mである。

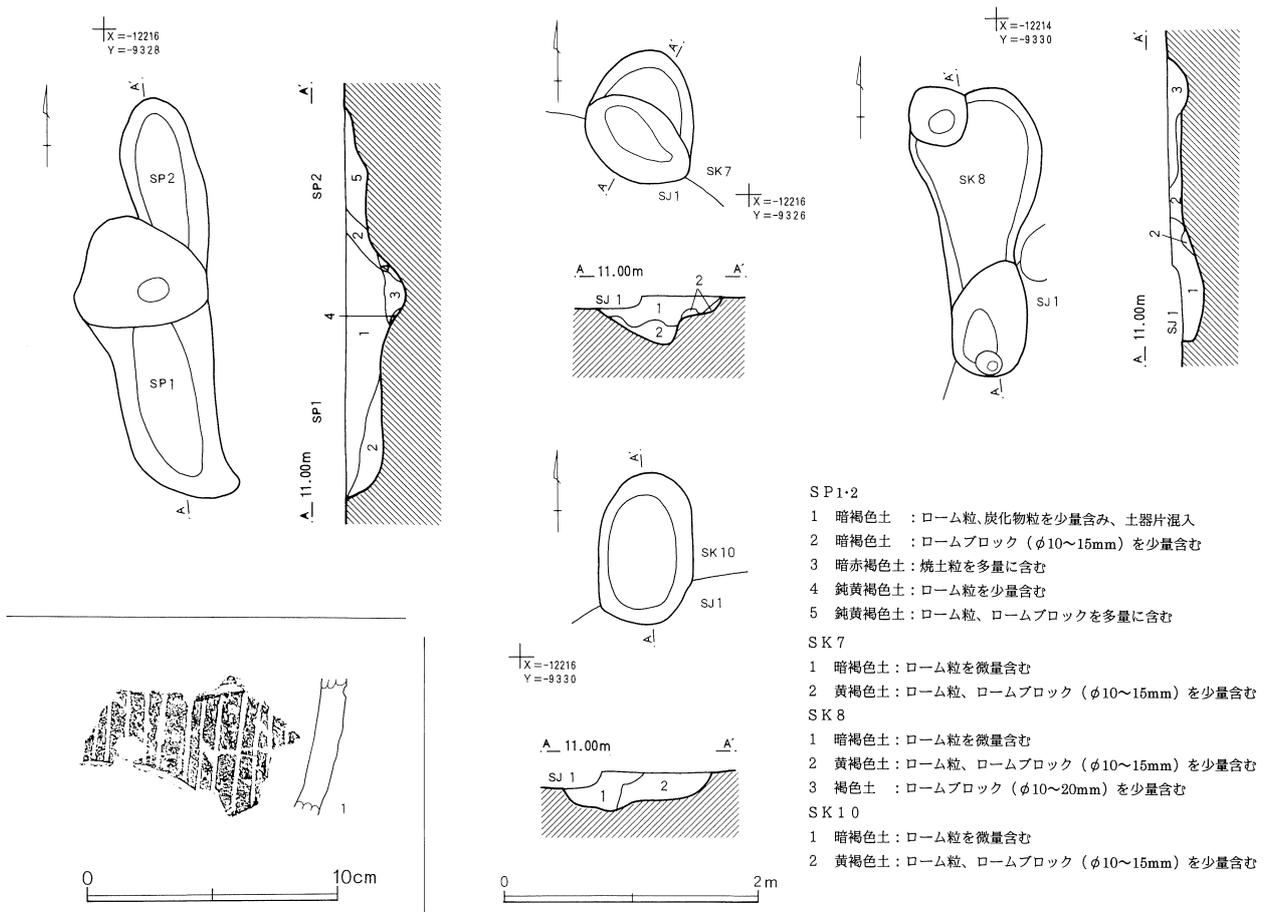
遺物は、繊維を含む縄文土器の小片が1点である。SJ 1に先行することから、遺構の帰属時期は、縄文時代早期である可能性がある。

第8号土壇<SK 8 (旧 SK10)> (第8図)

位置は、D-1・2グリッドである。SJ 1に壊されている。

平面形は1.3×0.6mの瓢箪形で、南北に円形の掘り込みがある。深さは中央で0.1m、北側の掘り込み

第8図 炉跡・土壇と出土遺物



(3) 遺構外出土の遺物

遺構外出土土器 (第9図)

遺構外及び弥生時代以降の遺構覆土内から出土した遺物のうちから主なものを報告する。出土地点は、1がS J 9、5がS J 6、それ以外はS J 5である。S J 5は、S J 1の南2.5mの位置にあるが、覆土から縄文土器片が集中的に出土している。後述するとおり弥生時代後期の遺構だが、縄文時代中期の遺構と重複し、それを壊している可能性がある。

1、2は前期後半の土器である。

1は連続する鋸歯状の貝殻文を施した深鉢形土器の胴部破片である。2は口縁部外端部に低隆帯を貼付し、

幅狭段帯部を作出している。縄文は単節R Lである。内削状に尖った口縁部形態である。

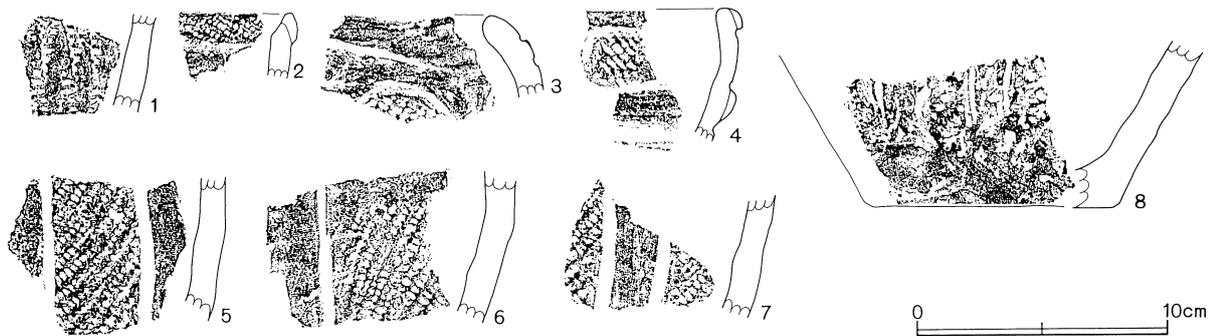
3～8は中期後葉の加曽利E式である。

3、4はキャリパー形深鉢形土器の口縁部の破片である。隆帯と沈線によって楕円区画文を施す。区画内に縄文を施す。3は単節R L、4は無節Lを施す。

5～7は深鉢形土器の胴部破片である。懸垂文を施す。いずれも縦位の沈線間に単節R Lの縄文を施す。

8は深鉢形土器の底部破片である。懸垂文の下端が認められる。縄文は単節R Lを施す。

第9図 遺構外出土土器



2. 弥生時代

(1) 住居跡

第2号住居跡<SJ 2> (第10・11図)

位置は、C-1・2およびD-1・2グリッドである。

平面規模は、長径3.3m、短径3.2m、床面積は9.0㎡である。平面形は隅丸方形で、中心軸方向はN-31°-Wである。壁は最高0.3mである。

柱穴は認められず、炉は床面中央北壁寄りに設置されていた。平面規模0.5×0.4m、深さ0.05mである。そして炉の三方を取り巻くように、床面中央付近に「U」字形の硬化面が広がっていた。炉の寄る北壁に相対する南壁に接して、P1が掘り込まれていた。

床は、ロームを主体とする土を敷き固めた貼床で、厚さ0.05~0.1mである。床下の地山は、ほぼ平坦に掘り込まれていた。

出土遺物は少なく、縄文・弥生土器の小片10余点、鉄製品1点などである。

3は刀子とみられる鉄製品である。床面下から出土した。

遺物は少ないが、その状況と遺構の構造などから、遺構の帰属時期は、弥生時代後期である。

第3号住居跡<SJ 3> (第12・13図)

位置は、D-1グリッドである。SK14・15・16と重複している。SK15に壁上面を壊されているが、他との先後関係は不明である。

平面規模は、長径3.4m、短径は推定3.1m、床面積は9.1㎡である。平面形は隅丸方形で、中心軸方向はN-27°-Wである。壁は最高0.5mである。

柱穴は認められず、炉は床面中央北壁寄りに設置されていた。平面規模1.0×0.5m、深さ0.05mである。床面中央一帯には、硬化面が広がっていた。床面南東隅付近にP1~P3が集中して掘り込まれていた。P2はごく浅いが、覆土が細礫を含んでいた。弥生時代後期~古墳時代前期の竪穴住居跡において、炉を背にした左前方隅付近で小砂利と粘土の集積がしばしば認められており、それに関連すると思われる。

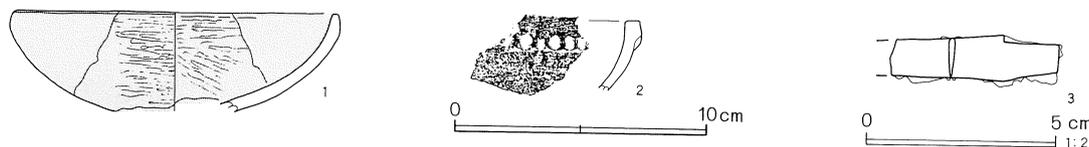
床は、ロームを主体とする土を敷き固めた貼床で、厚さ0.05mである。床下の地山は、壁の四周に幅の狭い段を残して掘り込まれていた。

出土遺物は少なく、縄文・弥生土器の小片60余点である。1~5は、P1とその付近から出土した。

2は、開きが大きく、折返し部分が水平に近い。口径に比べ、頸部は細く括れる器形と推定される。内面を細縄文と円形付文で加飾する一方、外面は無文でハケメを残している。内外面とも赤彩されていた可能性がある。3は、器面が風化しているが、本来無文であったとみられる。9は砂岩製の砥石である。

これらの遺物からみて、遺構の帰属時期は、弥生時代後期である。

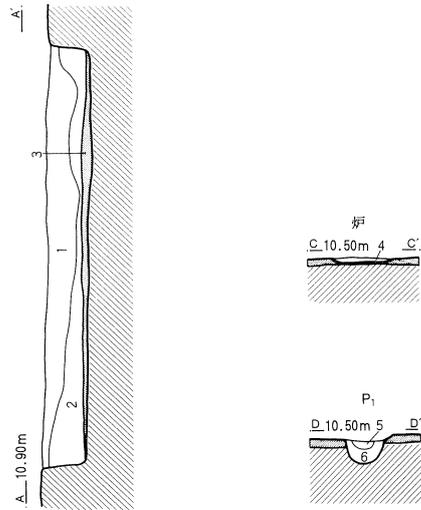
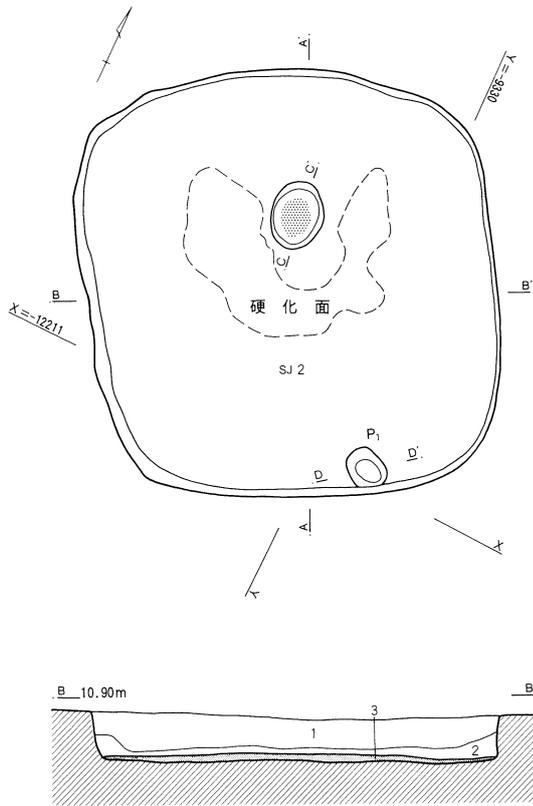
第10図 第2号住居跡出土遺物



第2号住居跡出土遺物観察表 (第10図)

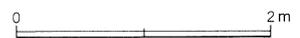
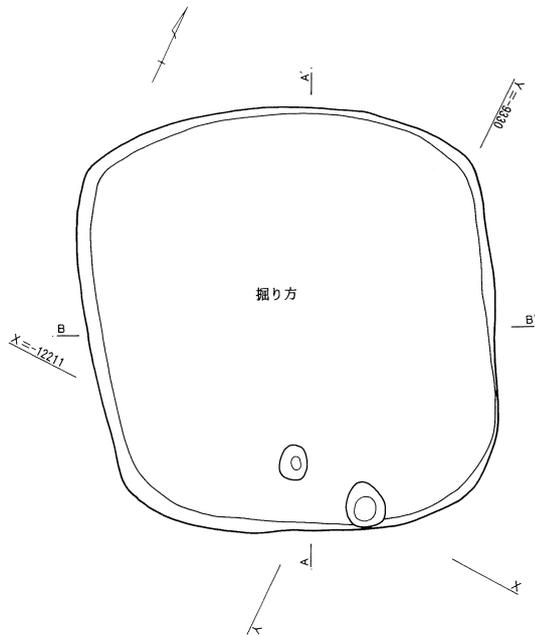
番号	器種	口径	器高	底径	焼成	色調	残存率	整形、調整等
1	鉢か高杯	(12.6)			劣	赤褐	底部を除き15	外;ヨコ・ナナメミガキ、内;ヨコ・ナナメミガキ、口唇部;ヨコナデ、内外赤彩
2	鉢?				良	明赤褐	口縁部10未満	外;ナデ、口縁部外;ナデ、折返し下端に押圧キザミ、内;やや雑なナデ

第11図 第2号住居跡

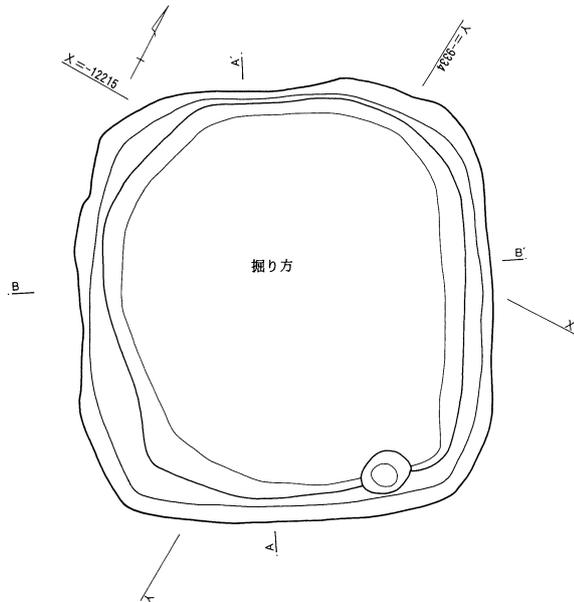
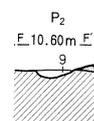
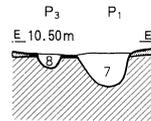
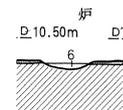
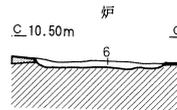
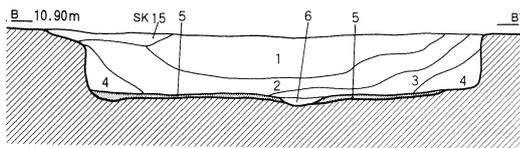
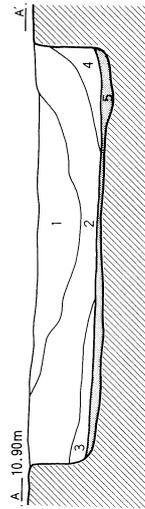
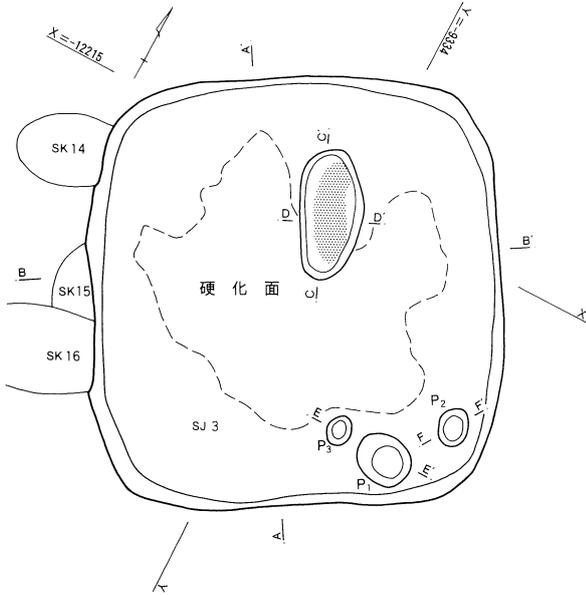


SJ 2

- 1 黒褐色土 : ローム粒、ロームブロック (φ3~10mm) 多量、炭化物粒を少量含む
- 2 黒褐色土 : ローム粒、ロームブロック (φ3~10mm)、炭化物粒を多量に含み、しまり強い
- 3 黄褐色土 : ロームブロック (φ3~10mm) 多量、炭化物粒を少量含み、しまり強い。床構築土
- 4 暗赤褐色土 : 焼土粒、焼土ブロック (φ3~5mm) 多量、炭化物粒を少量含む
- 5 黒褐色土 : ローム粒、炭化物粒を少量含む
- 6 黄褐色土 : ローム主体。地山崩落土

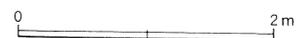


第12図 第3号住居跡

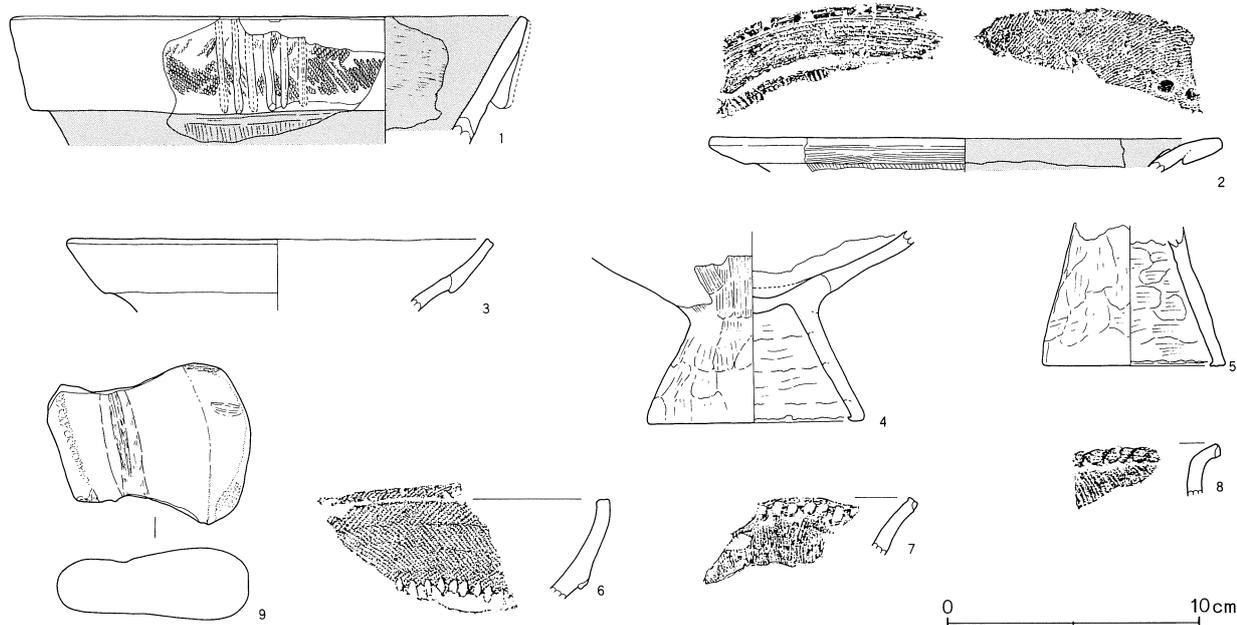


SJ 3

- 1 黒褐色土：ローム粒、ロームブロック（ $\phi 3\sim 5\text{mm}$ ）を少量含む
- 2 褐色土：ローム粒多量、ロームブロック（ $\phi 3\sim 10\text{mm}$ ）、炭化物粒を少量含む
- 3 黒褐色土：ローム粒、ロームブロック（ $\phi 3\sim 5\text{mm}$ ）、炭化物粒を少量含む、しまり強い
- 4 黄褐色土：ローム粒、ロームブロック（ $\phi 3\sim 10\text{mm}$ ）を多量に含む
- 5 黄褐色土：ローム主体、黒褐色土が少量混入し、しまりきわめて強い。床構築土
- 6 黒色土：焼土粒、炭化物粒多量、焼土ブロック（ $\phi 3\sim 4\text{mm}$ ）、ローム粒を少量含む
- 7 黒褐色土：ローム粒、ロームブロック（ $\phi 3\sim 5\text{mm}$ ）を少量含む
- 8 暗褐色土：ローム粒、炭化物粒を少量含む
- 9 褐色土：ローム粒、ロームブロック（ $\phi 3\sim 5\text{mm}$ ）、炭化物粒多量、細礫（ $\phi 1\sim 2\text{mm}$ ）を少量含む



第13図 第3号住居跡出土遺物



第3号住居跡出土遺物観察表（第13図）

番号	器種	口径	器高	底径	焼成	色調	残存率	整形、調整等
1	壺	(20.0)			良	にぶい橙	口縁部10未満	頸部外；赤彩、タテミガキ、口縁部外；単節LR+RL羽状縄文+6本一組棒状付文、内；赤彩、ヨコミガキ
2	壺	(20.0)			優	明赤褐	口縁部10未満	頸部外；タテハケ、口縁部外；ヨコハケ、口縁部内；赤彩、横走斜縄文+円形付文
3	壺	(16.4)			優	にぶい黄橙	口縁部10未満	表面風化し調整不明瞭、外；ヨコナデ、内；ヨコナデ？ 口縁部；シャープな面取り
4	台付甕			(8.4)	良	にぶい赤褐	脚部100	底部外；タテハケ、脚部外；ナデ+一部タテハケ、底部内；ナデ、脚部内；ヨコヘラナデ
5	台付甕			(7.0)	良	にぶい赤褐	脚部80	外；タテナデ、内；ヨコナデ
6	壺？				良	橙	口縁部10未満	外；単節LR+RL+RL+LR縄文4段、下端に押圧キザミ、以下赤彩、口唇部；単節LR縄文、内；赤彩、ヨコミガキ
7	甕				優	灰褐	口縁部10未満	外；タテハケ、口唇部；面取り+押圧キザミ、内；ヨコハケ+ナデ
8	甕				優	にぶい褐	口縁部10未満	外；ナナメハケ+ヨコナデ、口唇部；面取り+密な工具押圧キザミ、内；ヨコハケ+ヨコナデ

第4号住居跡<SJ 4>（第14図）

位置は、D・E-1グリッドである。

平面規模は、長径3.9m、短径3.4m、床面積は10.6㎡である。平面形は隅丸方形で、中心軸方向はN-64°-Wである。壁は最高0.4mである。

柱穴は認められず、炉は、床面中央やや西壁寄りに炉1、同じく北壁寄りに炉2が設置されていた。炉1は、平面規模0.55×0.5m、深さ0.06mである。炉2

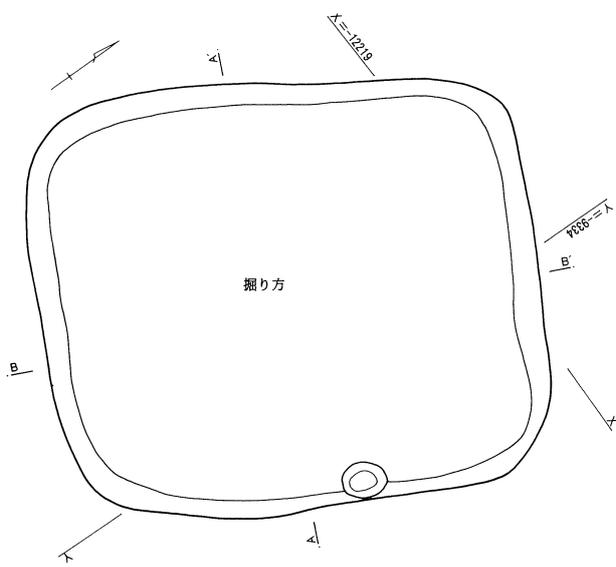
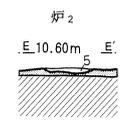
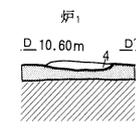
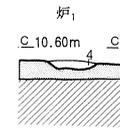
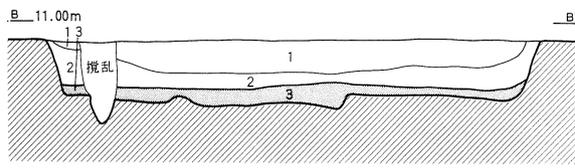
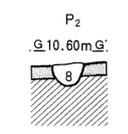
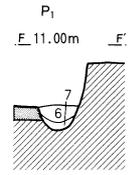
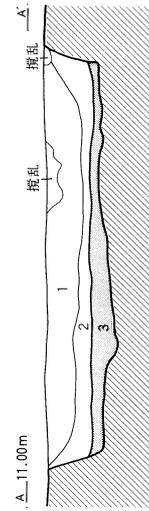
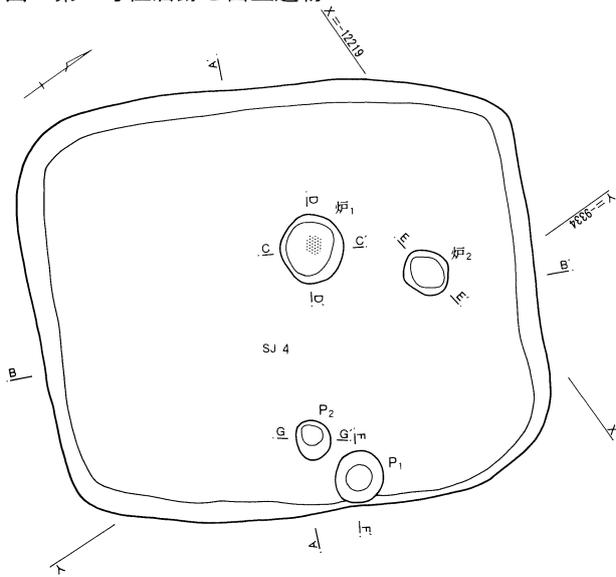
は、平面規模0.4×0.3m、深さ0.05mである。ピットは、東壁中央付近にP1、P2が掘り込まれていた。

床は、ソフトロームを主体とする土を敷き固めた貼床で、厚さ0.1~0.2mである。

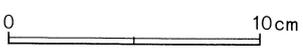
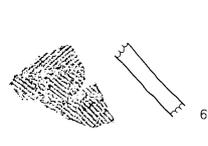
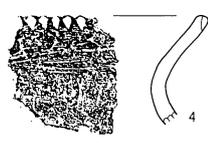
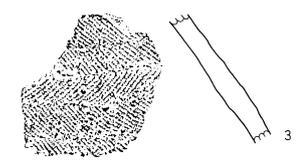
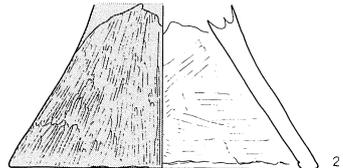
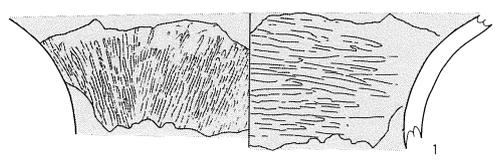
出土遺物は、弥生土器小片など約60点である。

1は大型壺の頸部である。胎土、調整等の作風が5、SJ 3-6と似ており、同一個体の可能性がある。遺構の帰属時期は、弥生時代後期である。

第14図 第4号住居跡と出土遺物



- S J 4
- 1 黒褐色土 : ローム粒、炭化物粒を少量含む
 - 2 褐色土 : ローム粒、ロームブロック (φ3~10mm) 少量、焼土粒を微量含む
 - 3 黄褐色土 : ソフトローム主体。ロームブロック (φ3~10mm)、黒色土が少量混入し、しまり強い。床構築土
 - 4 暗赤褐色土 : 焼土粒、焼土ブロック (φ3~5mm) 多量、ロームブロック (φ3~5mm)、炭化物粒を少量含む
 - 5 暗赤褐色土 : 焼土粒焼土ブロック (φ3~5mm)、ロームブロック (φ3~5mm) を多量に含む
 - 6 黒褐色土 : ローム粒、炭化物粒 (φ1~2mm) を少量含む
 - 7 黄褐色土 : ローム主体。地山崩落土
 - 8 暗褐色土 : ローム粒、炭化物粒、焼土粒を少量含む



第4号住居跡出土遺物観察表（第14図）

番号	器種	口径	器高	底径	焼成	色調	残存率	整形、調整等
1	壺				優	赤褐	頸部15	外；赤彩、タテミガキ、内；赤彩、ヨコミガキ
2	高杯			(12.1)	優	にぶい赤褐	脚部15	外；赤彩、タテミガキ、内；ナデ？+裾部縁辺にヨコナデ
3	壺				良	橙	肩部10未満	外；単節RL+RL+LR+RL+RL縄文5段、内；雑なヨコヘラナデ
4	甕				良	橙	口縁部10未満	口縁部外；ヨコヘラナデ、口唇部；押圧キザミ、口縁部内；ヨコナデ
5	壺？				優	にぶい橙	口縁部10未満	外；単節LR+RL+RL+LR縄文4段、下端に押圧キザミ、以下赤彩、口唇部；単節LR縄文、内；赤彩、ヨコミガキ、SJ3-6に作風酷似、同一個体の可能性有
6	壺				良	にぶい褐	肩部10未満	外；単節LR+RL+RL縄文3段

第5号住居跡<SJ5>（第15・16図）

位置は、E-2グリッドである。SJ7・12と重複する。土層断面図からは、SJ5が、9~11層を覆土とする遺構に壊されている状況が明確に読み取れる。ただしその遺構がSJ7、SJ12のいずれであるかははっきりしない。この点については、次節SJ12について報告する中で詳述する。SJ12は平安時代の遺構であることから、それとの先後関係に検討の余地はないが、9~11層あるいはそれらの下層いずれかがSJ7の覆土とすれば、SJ7が後出ということになる。

東半部が調査範囲外にあたるため、平面規模は不明であるが、径4m前後の隅丸方形とみて大過ないだろう。中心軸方向はN-57°-Wである。壁は最高0.4mである。南壁には、2mにわたり壁溝が認められる。

柱穴は、東壁両隅に掘り込まれたP1、P2がそれぞれにあたりとみられる。ともに深さは約0.4mである。明瞭な柱痕は認められない。炉は、柱穴間やや中央寄り、屋内全景に位置付ければ、床面中央やや北壁寄りと推定される位置に設置されていた。平面規模1.0×0.9m、深さ0.1mで、炉床は貼床上である。柱穴と炉の西側床面一帯には、硬化面が広がっていた。

床は、ロームとそのブロックを主体とする土を敷き固めた貼床で、厚さ0.05~0.2mである。床下の地山は、床面中央付近を高くして掘り込まれていたようだ。

出土遺物は、縄文・弥生土器の小片を主体に約90点である。縄文土器の混入が多く、黒曜石5片、チャート1片を含め、縄文時代にかかわる遺物が約6割を占め

る。

1は甕の上半部である。炉の付近から3片にわかれて出土し、接合した結果2片にまとまった。3は甕の肩部だが、やはり炉の付近から出土した。頸部下端の押圧キザミは、縄文原体等の圧痕とみられる。直下胴部の調整はきわめて雑である。6は土製勾玉である。調査範囲限界付近で出土した。

これらの遺物からみて、遺構の帰属時期は、弥生時代後期である。

第6号住居跡<SJ6>（第17・18図）

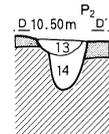
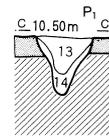
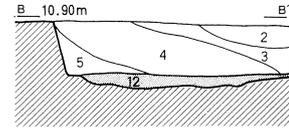
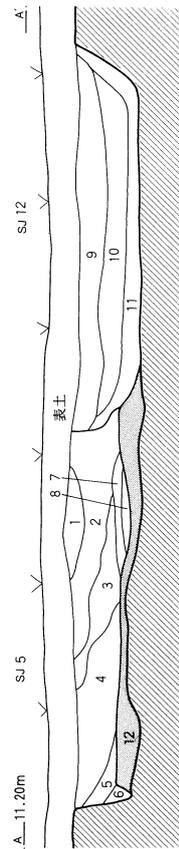
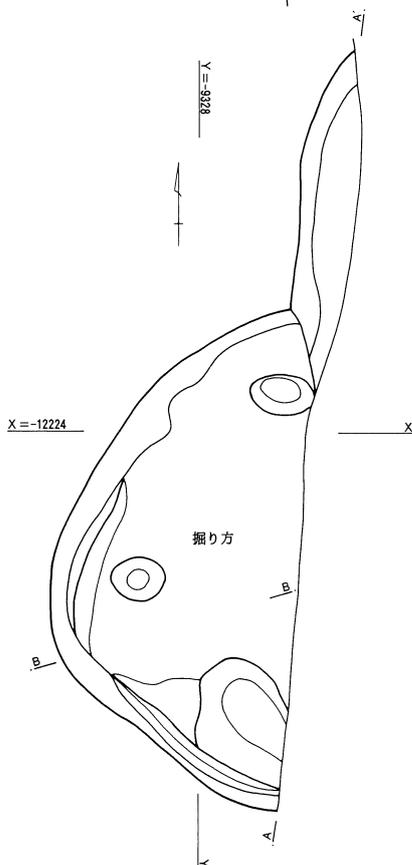
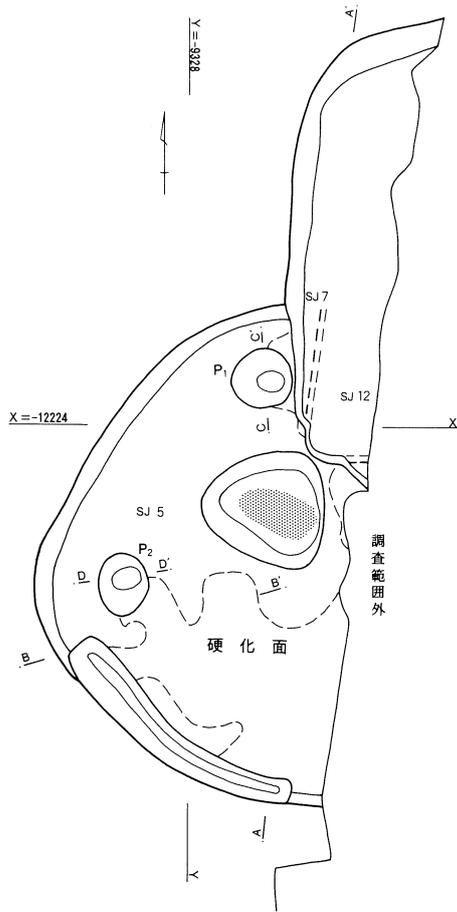
位置は、E-1・2グリッドである。SJ5の南西1mに近接する。

平面規模は、長径3.3m、短径3.0m、床面積は7.4㎡である。平面形は隅丸方形で、中心軸方向はN-68°-Wである。壁は最高0.5mである。

主柱穴は認められないが、西壁際中心軸上に位置するP2は、掘り込みも比較的深く、建物の上部構造にかかわる可能性がある。炉は、床面中央やや西壁寄りに設置されていた。平面規模0.95×0.6m、深さ0.1mである。炉床は、厚い貼床上である。ピットは、上述の他に、壁際東隅にP1が掘り込まれていた。

床は貼床である。その構造は、他の遺構に比べ複雑である。壁際から0.1~0.2m内側の地山を深さ0.3mほど掘り下げ、下からローム、黒色土、ロームの3層を重ねて敷き固めている。また地山の掘削にあたり、北壁中央から屋内中心部にむかって尾根状の掘り残し

第15図 第5・7・12号住居跡

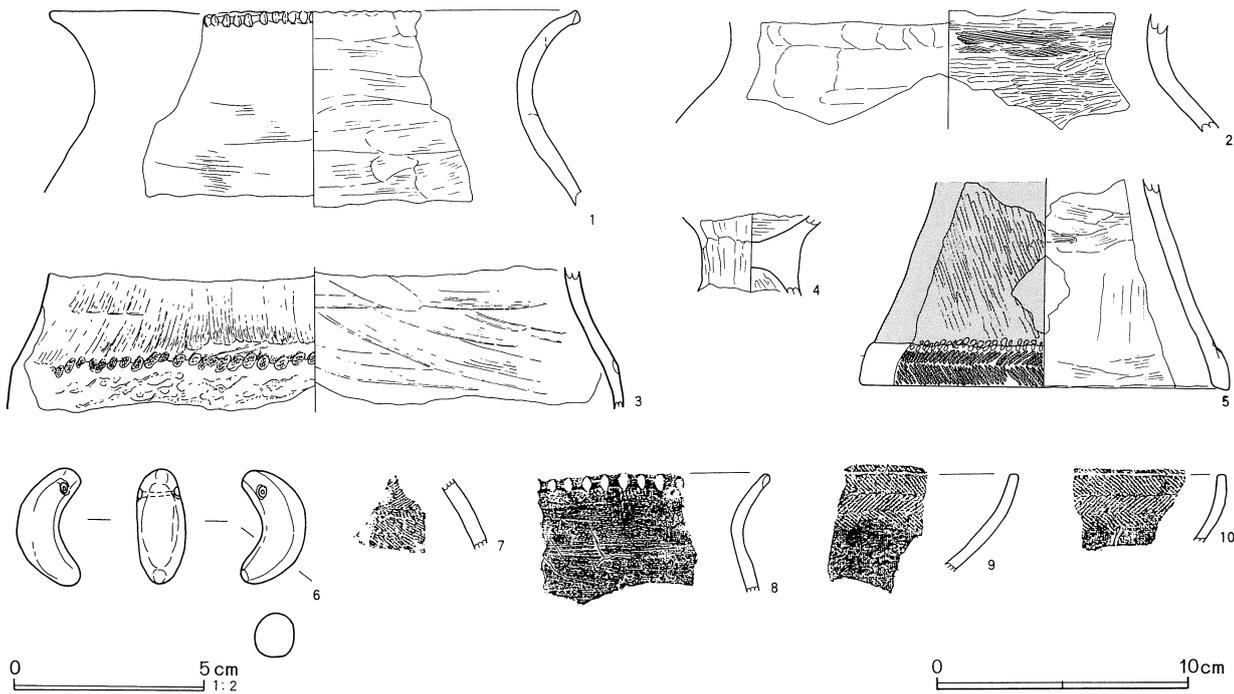


SJ 5・12

- 1 黒色土 : ローム粒、焼土粒を少量含む
- 2 黄褐色土 : ローム主体。炭化物粒、焼土粒を少量含む。しまりやや強い
- 3 黒褐色土 : ローム粒、ロームブロック (φ3~5mm) 多量、炭化物粒、焼土粒を少量含む
- 4 暗褐色土 : ローム粒、ロームブロック (φ3~10mm) 多量、炭化物粒を少量含む
- 5 黄褐色土 : ローム粒、ロームブロック (φ3~5mm) を少量含む
- 6 明黄褐色土 : ローム粒、ロームブロック (φ3~5mm) を多量に含む。地山崩落土
- 7 黒褐色土 : ローム粒、ロームブロック (φ3~5mm)、焼土粒を少量含む
- 8 黒色土 : ローム粒少量、焼土粒、焼土ブロック (φ3~5mm) を多量に含む
- 9 黒色土 : ローム粒、炭化物粒を少量含む
- 10 暗褐色土 : ローム粒多量、ロームブロック (φ3~5mm) を少量含む
- 11 褐色土 : ローム粒、ロームブロック (φ3~10mm) 多量、炭化物粒を少量含む
- 12 黄褐色土 : ローム粒、ロームブロック (φ3~20mm) 多量、黒色土、炭化物粒、焼土粒を少量含む。しまり強い。床構築土
- 13 黒褐色土 : ローム粒、ロームブロック (φ3mm)、炭化物粒を少量含む
- 14 褐色土 : ローム粒、ロームブロック (φ3~10mm) を多量に含む



第16図 第5号住居跡出土遺物



第5号住居跡出土遺物観察表（第16図）

番号	器種	口径	器高	底径	焼成	色調	残存率	整形、調整等
1	甕	(20.6)			良	にぶい橙	上半部20	外；ナデ、口唇部；押圧キザミ、内；ヨコナデ
2	甕				優	にぶい褐	頸部20	外；ナデ、内；ヨコハケ＋ヨコミガキ
3	甕				優	褐	肩部20	頸部外；タテヘラナデ、下端部；押圧キザミ、胴部外；雑なナデ、内；ヨコヘラナデ
4	台付甕？				良	にぶい褐	底部100	外；タテヘラナデ、底部内；ミガキ、脚部内；ナデ
5	高杯			(14.5)	優	にぶい黄橙	脚部20	外；赤彩、タテミガキ、脚裾部折返し部分；単節LR＋RL羽状縄文、上端に押圧キザミ、内；ナデ
6	土製勾玉				良	明褐	100	全体に丸みを帯びる、重さ5g
7	壺				良	にぶい橙	肩部10未満	外；無節LR＋RL羽状縄文、内；ナデ
8	甕				良	にぶい黄橙	口縁部10未満	外；ヨコヘラナデ、口唇部；面取り丸くヨコナデ＋工具押圧キザミ、内；ヨコナデ
9	鉢か高杯				優	赤褐	口縁部10未満	口縁部外；単節RL＋LR＋RL縄文3段、以下赤彩、ミガキ、口唇部；単節RL縄文、内；赤彩、ミガキ
10	鉢か高杯				優	赤褐	口縁部10未満	口縁部外；単節RL＋LR＋RL縄文3段、以下赤彩、ミガキ、内；赤彩、ヨコミガキ

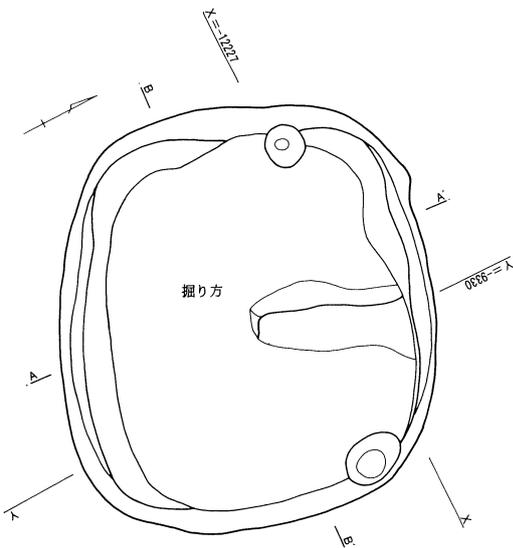
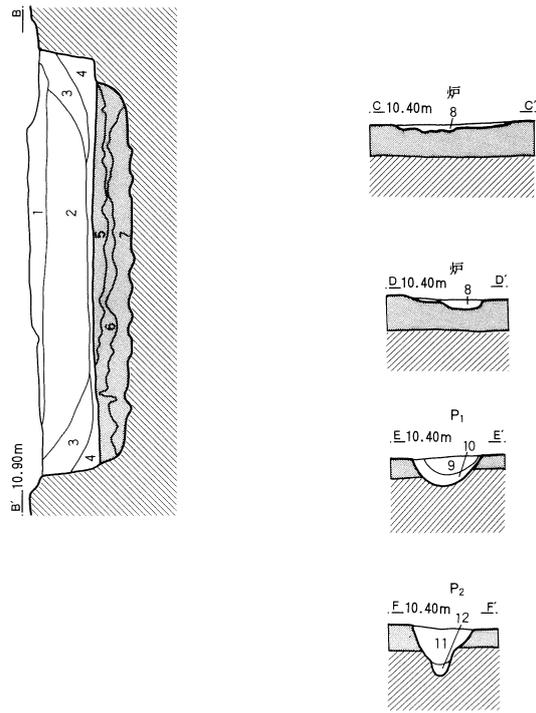
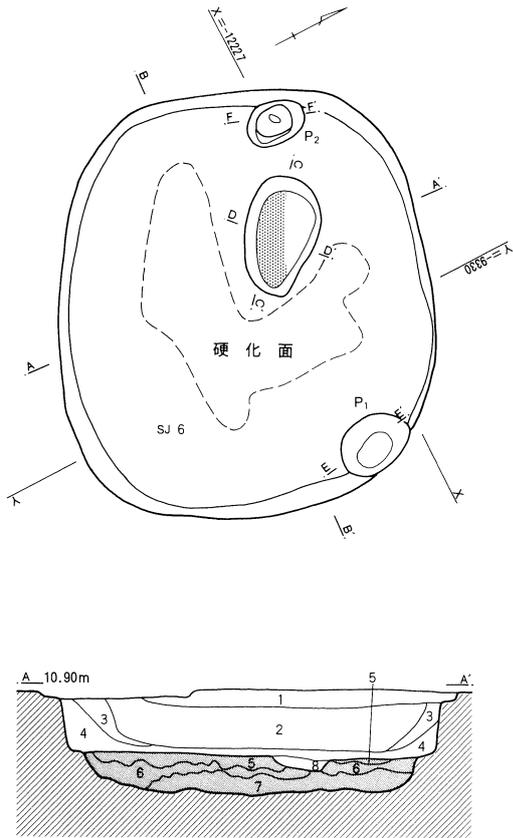
がある。

出土遺物は、縄文・弥生土器小片を主体に約60点と多くないが、床面上から完形品あるいは全容が復原できる資料が出土した。さらに石器がある。

1は甕の胴下半部である。炉とP2間の床面付近で

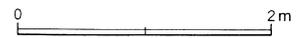
出土した。2は炉の直上から出土した。口縁部の大部分と胴部の1/4周が欠損しているが、全容がうかがえる。平底甕としても希少な例である。3と4は、黒い色調が特徴的で、同一個体とみられる。小型の高杯である可能性が高い。3は、わずかながら口唇部が波状にも

第17図 第6号住居跡

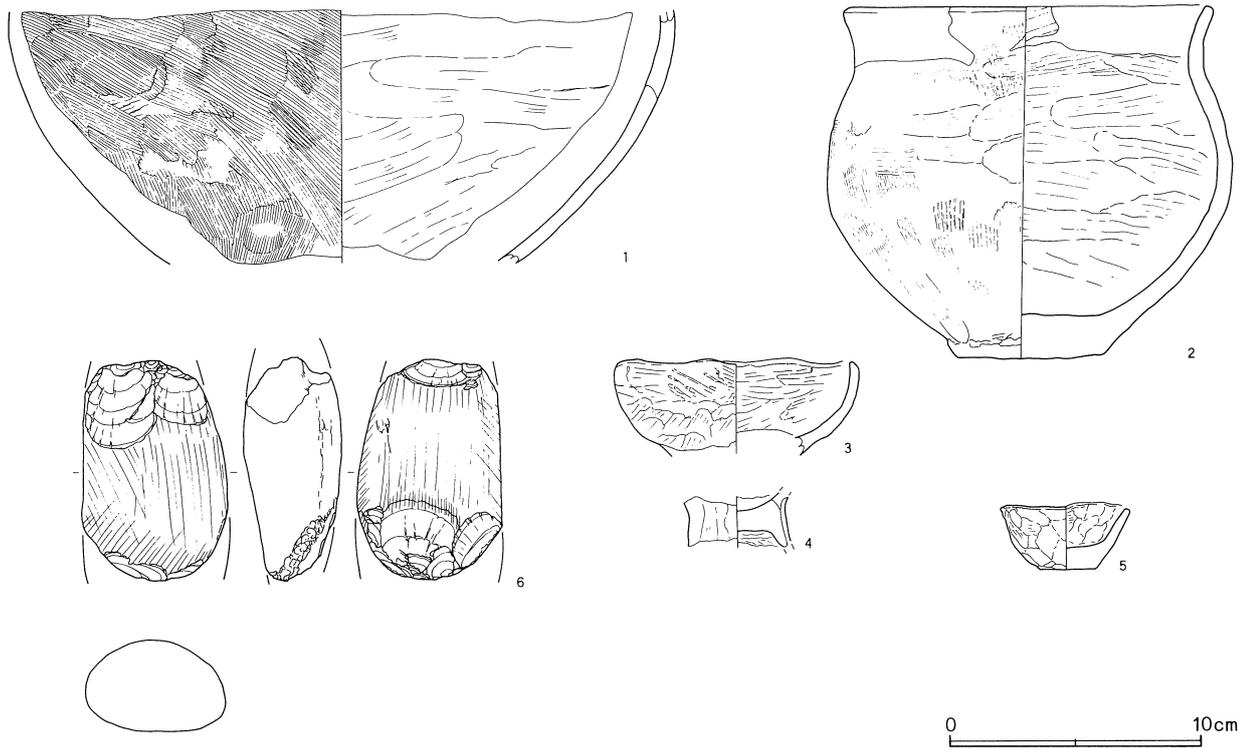


SJ 6

- 1 黒褐色土 : ローム粒、ロームブロック (φ5~10mm)、炭化物粒を含む。攪乱が主体
- 2 暗褐色土 : ローム粒、ロームブロック (φ5~30mm) 多量、焼土ブロック少量含む
- 3 黒褐色土 : ローム粒を多量に含む
- 4 黒褐色土 : ローム粒、ロームブロックを少量含む。炉付近は焼土粒を少量含む
- 5 明黄褐色土 : ローム主体。黒色土が少量混入する。しまり強い。床構築土
- 6 黒色土 : ローム粒、ロームブロック (φ3~20mm) 多量、炭化物粒、焼土粒を少量含む。床構築土
- 7 明黄褐色土 : ローム粒、ロームブロック (φ3~30mm) 主体、しまり弱い。床構築土
- 8 黒褐色土 : 焼土粒、焼土ブロック (φ3~10mm) 多量、ロームブロック (φ3~5mm)、炭化物粒を少量含む
- 9 黒色土 : ローム粒、ロームブロック (φ3~5mm) を少量含む
- 10 黄褐色土 : ローム粒、ロームブロック (φ3~5mm) 多量、焼土粒を少量含む
- 11 明黄褐色土 : ローム粒、ロームブロック (φ3~5mm) 多量、炭化物粒を少量含む
- 12 黄褐色土 : ロームを主体とする



第18図 第6号住居跡出土遺物



第6号住居跡出土遺物観察表（第18図）

番号	器種	口径	器高	底径	焼成	色調	残存率	整形、調整等
1	甕				良	橙	胴下半部25	外；ナナメハケ、内；平滑なヘラナデ
2	平底甕	(14.0)	13.9	5.8	良	にぶい橙	80	胴部外；タテハケ+ナデ、口縁部内外；ヨコナデ、頸部内；ヨコヘラナデ
3	高杯？	(9.1)			優	褐灰	杯部50	外；雑なヘラナデ、口縁部内；ナデ、内；雑なミガキ、波状口縁の可能性有
4	高杯？				優	黒褐	底部100	底部外；タテヘラナデ、底部内；ミガキ、脚部内；ヘラナデ、3と同一個体の可能性有
5	小型鉢	4.9	2.6	2.1	良	黄褐	100	外；ナデ、スス付着、内；雑なナデ

見える。接合しない2片から復原したため、そのうねりが規則的に配置されているかは不明である。5は、ミニチュアともいえる小型鉢である。P1から出土した。完形品である。6は、凝灰質泥岩の磨製石斧である。2に接して出土した。

これらの遺物からみて、遺構の帰属時期は、弥生時代後期である。

第7号住居跡<SJ 7>（第15図）

位置は、E-2グリッドである。SJ 5、SJ 12と重複する。西辺部を除く大部分が調査範囲外にあたり、

また調査範囲内も、平安時代の遺構であるSJ 12に大半を破壊されているとみられ、詳細は不明である。

やや直線的な西壁とその両隅にかけての大部分は、SJ 7のものとみられる。平面規模は、南北長4~5mと推定される。

炉、ピット等は確認されていない。

出土遺物は、縄文土器小片2点、弥生土器小片4点である。

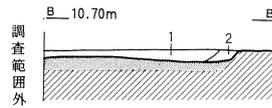
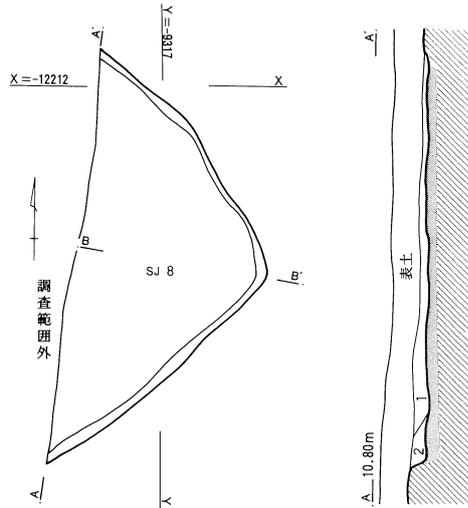
平安時代以前で、覆土中に弥生土器を含むことから、遺構の帰属時期は、弥生時代後期とみなしておきたい。

第8号住居跡<SJ 8> (第19図)

位置は、D-3グリッドである。

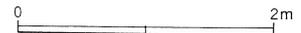
過半が調査範囲外にあたるため、平面規模は不明である。平面形は方形に近いように見える。中心軸を南北優位で求めると、その方向はN-35°-Wである。壁は最高0.1mである。

第19図 第8号住居跡



SJ 8

- 1 黒褐色土：ローム粒、ロームブロック（φ3~5mm）、炭化物粒を少量含む
- 2 黄褐色土：ローム粒、ロームブロック（φ3~5mm）を多量に含む



第9号住居跡<SJ 9> (第20・21図)

位置は、D-3・4グリッドである。調査範囲の東端に寄り、住居跡としては台地縁部にもっとも近い。

過半が攪乱により失われているが、平面形は、隅丸方形とみてよいだろう。壁は最高0.2mである。

炉、ピット等は確認されていないが、壁際を除く床面上に、硬化面の広がりが見られる。炉は、他の遺構の状況を参考にすると、北西壁寄りに設置されている

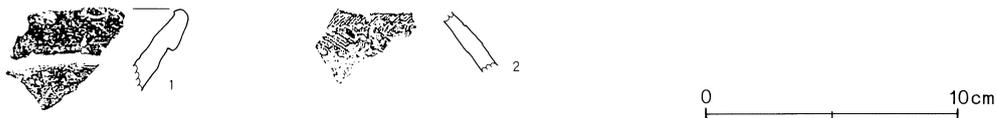
可能性が高い。そう仮定すると、中心軸方向は、N-38°-Wである。

床は貼床である。

出土遺物は、縄文・弥生土器小片が19点であった。弥生土器は、壺、台付甕脚部などが含まれていたが、図示できたのは2点である。

これらの遺物から、遺構の帰属時期は、弥生時代後期である。

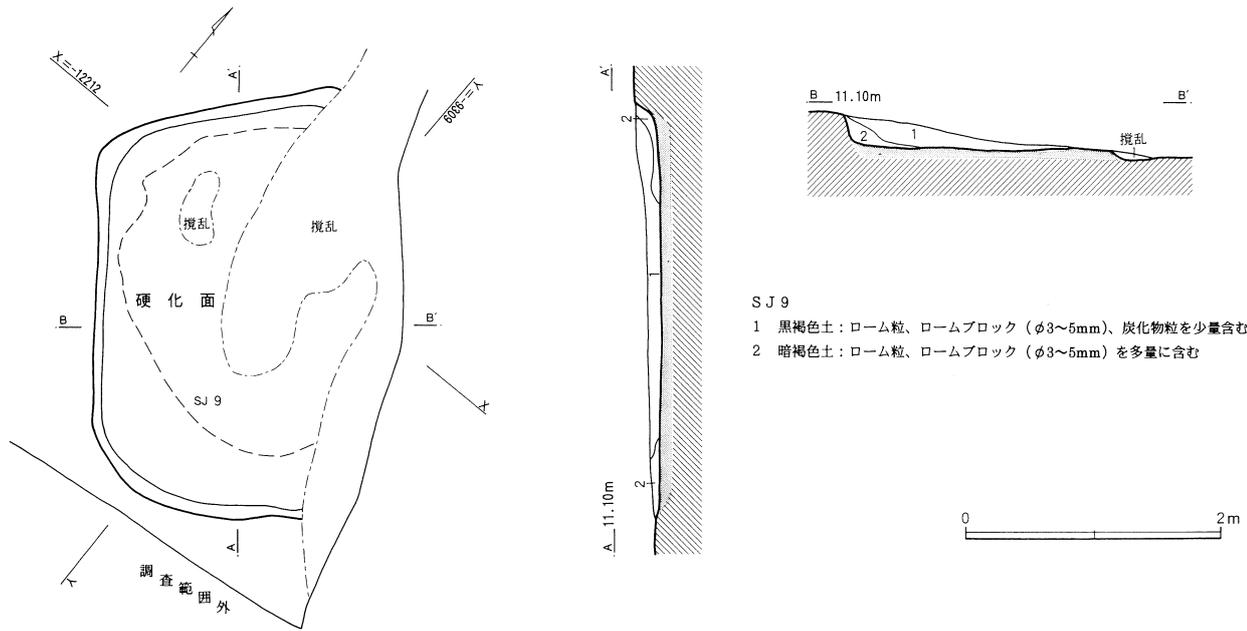
第20図 第9号住居跡出土遺物



第9号住居跡出土遺物観察表 (第20図)

番号	器種	口径	器高	底径	焼成	色調	残存率	整形、調整等
1	壺				良	にぶい褐	口縁部10未満	内外；ナデ、赤彩
2	壺				良	にぶい褐	肩部10未満	外；無節LR+RL羽状縄文、内；ナデ

第21図 第9号住居跡



第10号住居跡<SJ10> (第22・23図)

位置は、D・E-0グリッドである。調査範囲の西端にあたり、台地内奥に寄っている。縄文時代の住居跡S J 11を壊している。

過半が調査範囲外である。北東壁は4.4m以上、南西壁は2.7m以上である。東隅はほぼ直角で、平面形は、隅丸方形より方形に近い可能性がある。壁は最高0.6mである。

炉は、境界壁面にかかっていたハケメ甕4を取り上げる際、付近の床面に焼土が認められたことにより、境界に接する位置にあたと推定される。その北東に近接して、床に硬化面が認められる点も、炉と硬化面が近接する通例からみて、傍証となるだろう。ピットは、南東壁東隅近くにP 1、調査範囲境界南東壁寄りにP 2が掘り込まれていた。先述のとおり、P 3はS J 11に付属するとみられる。P 2は柱穴である可能性が高い。

中心軸方向は、北東壁に平行もしくは直交するだろうが、前者である可能性が高い。N-59°-Wである。

床は、ローム、ロームブロックを主体とする土を敷

き固めた貼床で、厚さは0.15~0.2mである。

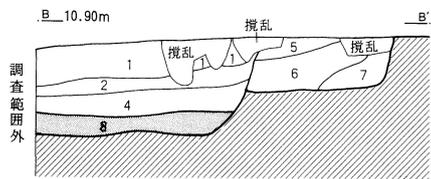
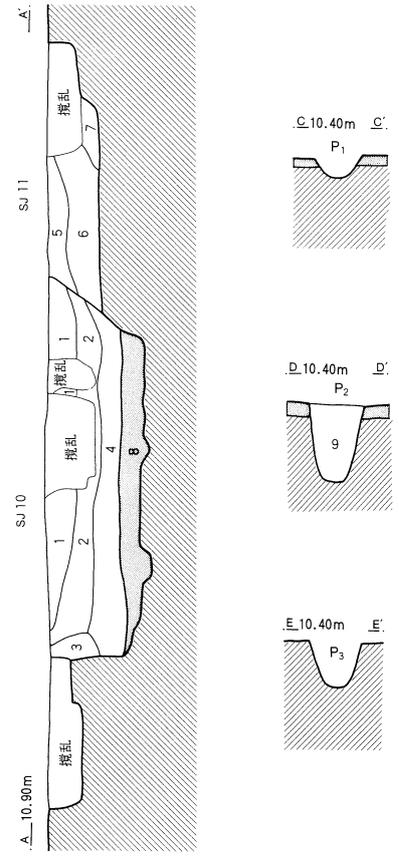
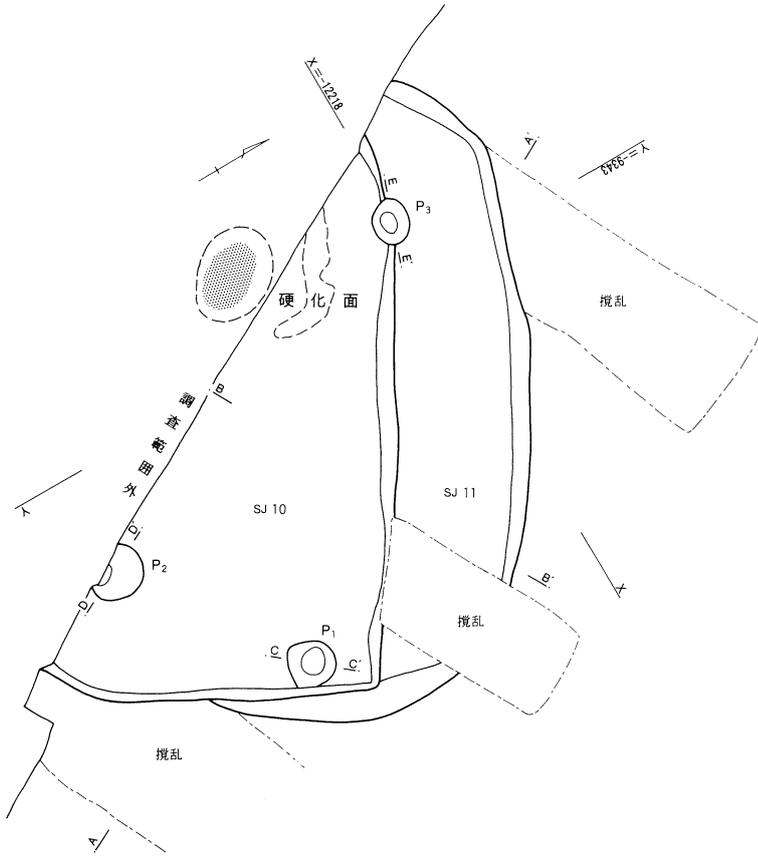
出土遺物は、図示した11点のほか、縄文・弥生土器の小片数10点がある。S J 11と一括で取り上げられた遺物が多いが、弥生土器はS J 10、縄文土器は、本来S J 10覆土に含まれていたものを含め、S J 11に帰属すると思われる。

1は、口縁部が屈折して外反する鉢である。底部から口縁部まで破片が接合したが、遺存率は低い。1、3は、偶然的な流れ込みではなく破碎後に一括投棄された可能性がある。4は、上述のとおり炉とみられる焼土面付近から出土した。胴部上半の1/2強が正立した状態であり、炉体土器として転用されていた可能性がある。遺構に伴うことは確実である。

11は、小片だが、沈線区画が確認された今回唯一の資料である。羽状縄文帯の上下を、1/2単位ずらした連続山形沈線で区画している。沈線は、細く深い。区画外を赤彩し、連続山形縄文帯を浮かび立たせているが、区画外の縄文は擦り消さずに残している。

以上の遺物から、遺構の帰属時期は、弥生時代後期である。

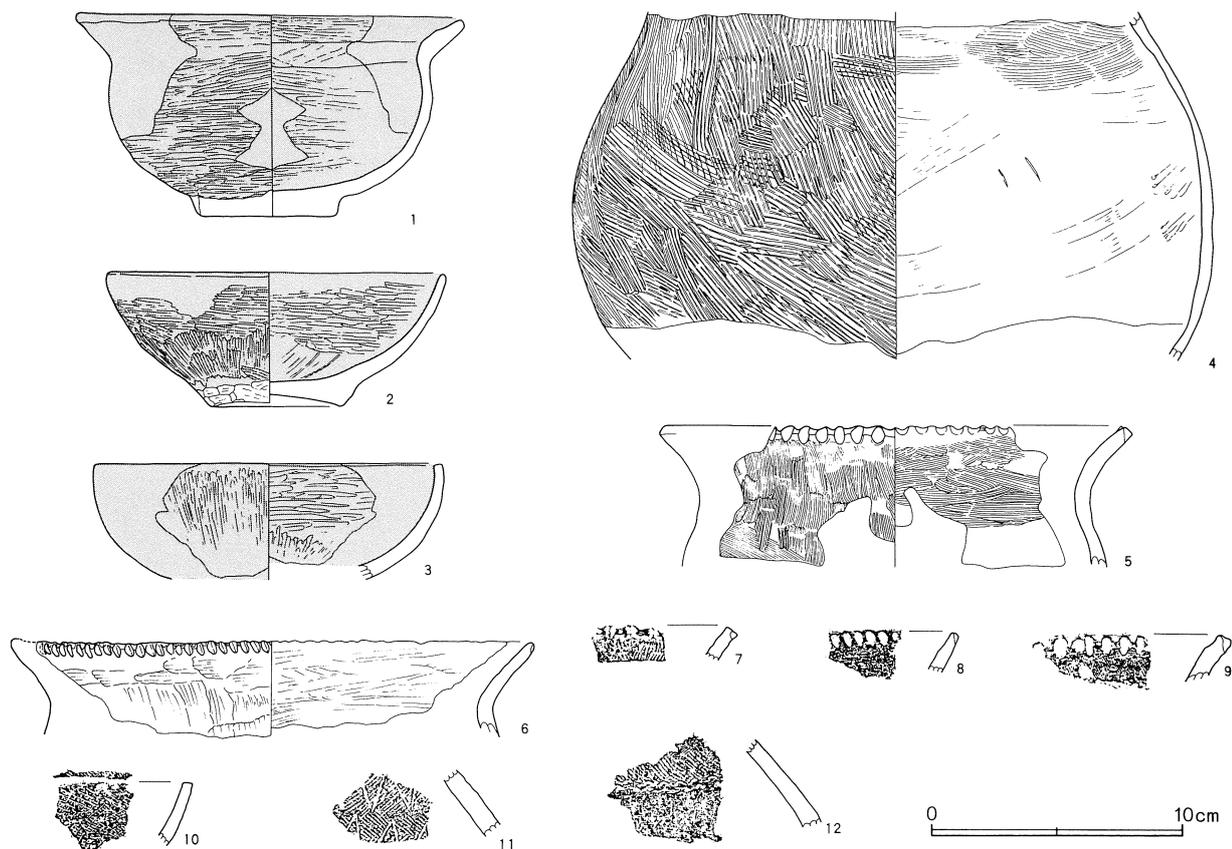
第22図 第10・11号住居跡



- SJ 10・11
- 1 黒色土 : ローム粒、炭化物粒、焼土粒を少量含む
 - 2 黒褐色土 : ローム粒、炭化物粒、焼土粒を少量含む
 - 3 黄褐色土 : ロームを主体とする。地山崩落土
 - 4 暗褐色土 : ローム粒、焼土粒多量、炭化物粒を少量含む。しまり強い
 - 5 黒褐色土 : ローム粒を多量に含む
 - 6 暗褐色土 : ローム粒、炭化物粒を少量含む
 - 7 黄褐色土 : ローム主体。地山崩落土
 - 8 黄褐色土 : ローム、ロームブロック (φ5~20mm) 主体。黒色土が少量混入する。しまり強い。床構築土
 - 9 明黄褐色土 : ローム主体。ロームブロック (φ3~10mm) が少量混入する



第23図 第10号住居跡出土遺物



第10号住居跡出土遺物観察表 (第23図)

番号	器種	口径	器高	底径	焼成	色調	残存率	整形、調整等
1	鉢	(15.0)	7.7	5.2	良	橙	20	口縁部外；ヨコナデ、以下ヨコミガキ、内；ヨコミガキ、内外赤彩
2	鉢	(13.2)	5.3	5.1	良	赤褐	40	外；上半ヨコミガキ、下半タテミガキ、内；上半ヨコミガキ、下半ヘラナデ、内外赤彩
3	鉢か高杯	(13.6)			優	赤褐	20	外；タテミガキ、内；上半ヨコミガキ、下半タテミガキ、内外赤彩
4	甕				優	にぶい橙	胴上半部50	外；タテハケ、一部ヨコハケ、内；ヨコ・ナナメヘラナデ、一部ヨコハケ
5	甕	(18.1)			良	にぶい橙	上半部15	外；タテハケ、口唇部；面取り+押圧キザミ、内；ナナメ・ヨコハケ
6	甕	(20.4)			優	黄褐	口縁部15	外；ヨコハケ+ナデ、口唇部；押圧キザミ、内；ヨコナデ
7	甕				良	褐	口縁部10未満	外；タテハケ、口唇部；押圧キザミ、内；ヨコハケ
8	甕				良	灰黄褐	口縁部10未満	外；ナデ、口唇部；押圧キザミ、内；ヨコナデ
9	甕				良	にぶい黄褐	口縁部10未満	外；タテハケ、口唇部；押圧キザミ、内；ナデ
10	鉢か高杯				優	明褐	口縁部10未満	外；網目様捺糸文、口唇部；縄文、赤彩、内；赤彩
11	壺				優	明褐	肩部10未満	外；単節LR+RL縄文2段+山形沈線文2段で区画、区画外赤彩
12	壺				優	褐	肩部10未満	外；無節LR+RL縄文2段+S字状結節文2段、以下赤彩、内；ナデ

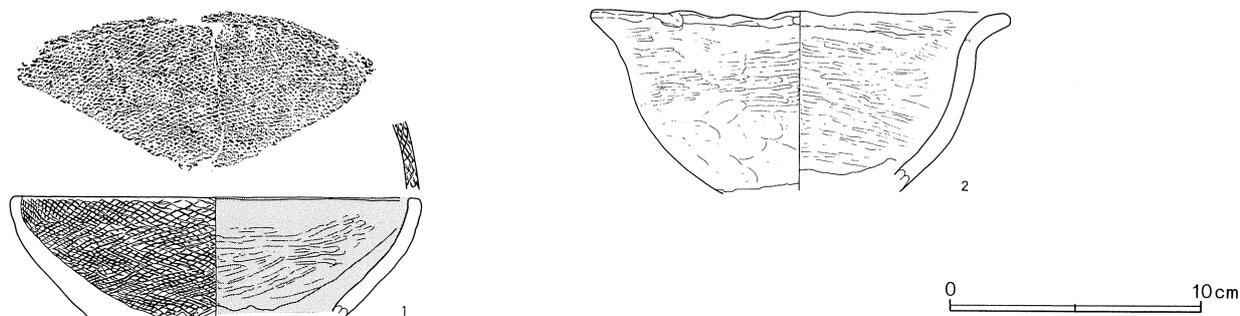
(2) 遺構外出土の遺物

遺構外出土土器 (第24図)

遺構外から、比較的大型の破片資料が出土している。1は、外面と口唇部に網目様捺糸文を施された土器である。下半は完全に失われているが、上方に大きく開く器形は、一見すると鉢あるいは高杯を思わせる。しかし、その場合、外面全体あるいはその大部分に文様を施す意匠は例外的である。器形と文様帯の関連を重視して類例をあたると、口縁部が内湾気味に開く単純口縁壺である可能性が高い。口縁部の開きはかなり大きくなるが、破片下端付近では傾斜が急になりつつあ

り、そこが頸部に近いことをうかがわせる。G区攪乱部分から出土した。グリッドは不明である。2は、やはり高杯もしくは鉢である。半周以上が遺存している。内外面にミガキを施しているが、成形はやや雑で、鈍重な作りである。下端付近は、煤の付着よりむしろ液体の塗布に似た黒化が水平に認められる。D-1グリッド表土からの出土である。同グリッドにはS J 2・3・4があるが、遺物に同一個体とみられる破片は見当たらず、いずれの遺構に関連するかは不明である。

第24図 遺構外出土土器



遺構外出土弥生時代遺物観察表(第24図)

番号	器種	口径	器高	底径	焼成	色調	残存率	整形、調整等
1	壺?	(16.0)			良	明褐	口縁部20	外; 網目様捺糸文6段、口唇部; 網目様捺糸文、内; 赤彩、ヨコミガキ
2	高杯か鉢	16.3			良	明黄褐	60	外; ヨコヘラナデ、口唇部; 雑な面取り、内; ヨコミガキ

3. 平安時代

(1) 住居跡

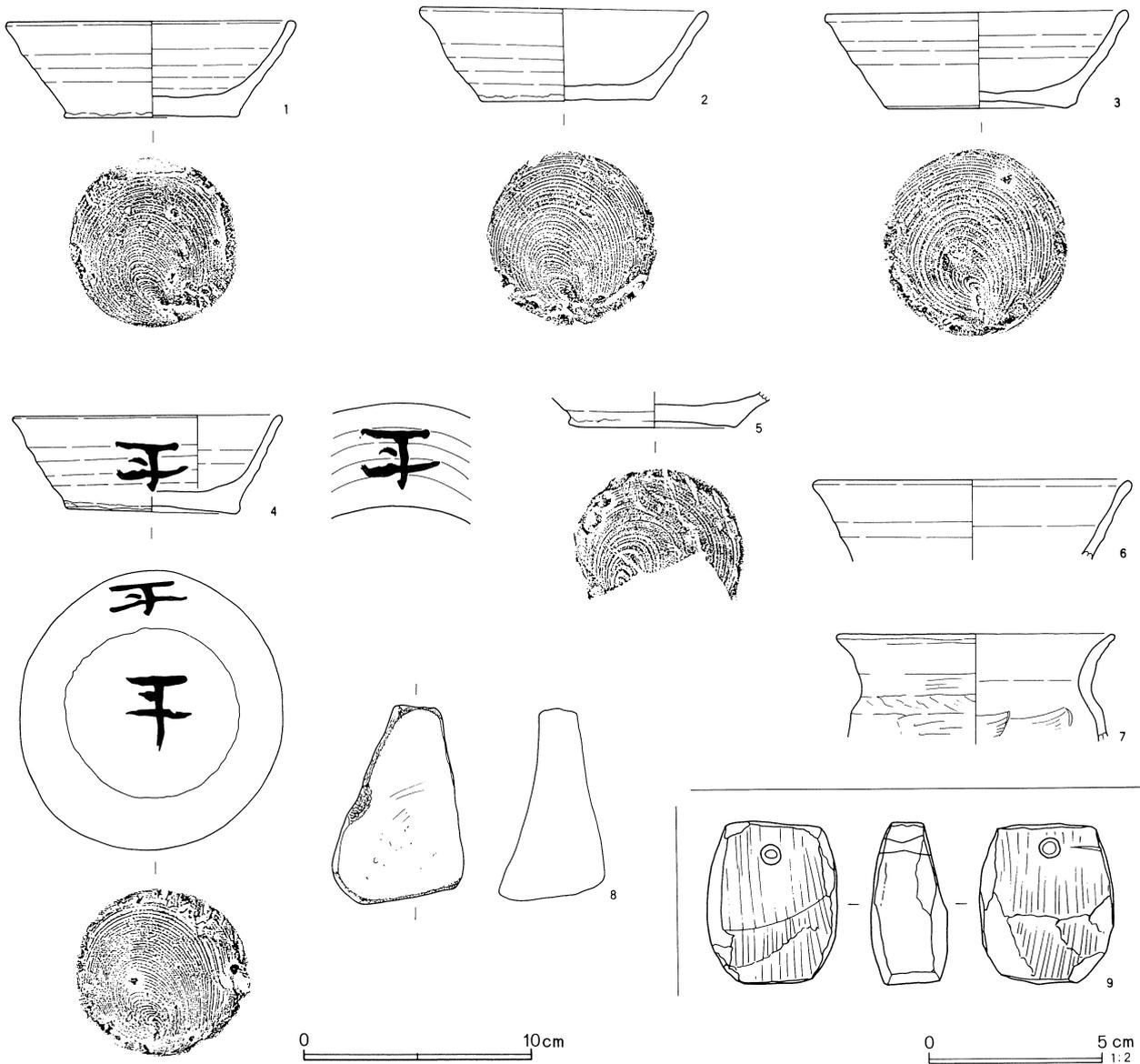
第12号住居跡 (第15・25図)

位置は、E-12グリッドである。弥生時代のS J 5・7を壊している。重複状況については、すでに前節でも触れているところだが、ここでは平面形の復原について述べる。

B区は、当初、第15図A-A'ラインが範囲の限界となっていた。まずS J 7が発掘され、A-A'ラインで土層断面が記録された。その後、囲柵を撤去し、A-A'ラインから道路際までの幅約0.5mを発掘したところ、

弥生時代の遺構と認識されていたS J 7覆土から平安時代の遺物がまとめて出土し、遺構の重複が明らかになった。平面を見ると、S J 12は南西隅のみ痕跡が読み取れる。ただし遺物の分布はS J 7北壁近くに及んでおり、北西隅は、その付近に求められるだろう。とすると、南北約3mの規模になる。A-A'ラインがちょうど両者の境界と重複するため、土層断面図の解釈は難しいが、覆土9・10層はS J 12に属する可能性が高い。11層についてははっきりしない。調査時

第25図 第12号住居跡出土遺物



第12号住居跡出土遺物観察表（第25図）

番号	器種	口径	器高	底径	焼成	色調	残存率	整形、調整等
1	杯	12.4	4.1	7.5	優	にぶい橙	50	土師器。ロクロ整形、底部回転糸切り
2	杯	12.2	4.1	7.5	優	にぶい橙	90	土師器。ロクロ整形、底部回転糸切り
3	杯	13.0	4.1	8.0	優	橙	80	土師器。ロクロ整形、底部回転糸切り
4	杯	11.5	4.3	7.4	優	にぶい橙	口縁一部欠	土師器。ロクロ整形、底部回転糸切り。外側面と底面に「土」の墨書
5	杯			7.1	良	にぶい黄橙	60	土師器。底部回転糸切り
6	杯	(13.4)			優	にぶい橙	30	土師器。ロクロ整形
7	甕	(11.8)			良	褐	20	口縁部内外；ヨコナデ、胴部外；ヨコケズリ、胴部内；ヨコヘラナデ

の所見によれば、11層上面の堆積が本来南限まで水平で、S J 5との境界に認められる11層下面の段につながるのとみることにより、11層上面がS J 12の床面と解釈する余地も皆無ではない。

その場合11層はS J 7に属し、S J 7はS J 5を壊していることになる。S J 2の壁高は、0.5mあるいは0.35mになる。

柱穴等は確認されていない。

遺構の一部を検出しただけではあるが、遺物は比較的豊富である。

1～6は、ロクロ土師器の杯である。1～5は、底部を回転糸切り後無調整である。いずれも胎土は緻密で、焼成もきわめて良好である。4は、側面と底部に「土」の墨書がある。墨跡は、きわめて明瞭である。また、1の内面見込には墨を塗りつけた痕跡が認められ、そこで筆に墨を含ませたようだ。8は凝灰岩製の砥石である。9は、やはり凝灰岩製の石製錘である。砥石としての使用痕が明瞭に残り、その転用品だろう。重さ54.1gである。

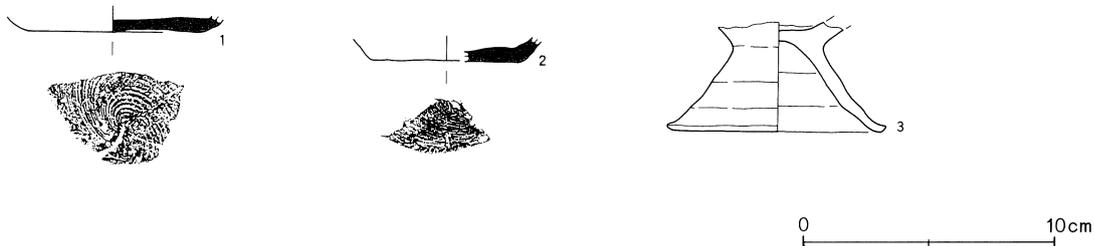
(2) 遺構外出土の遺物

遺構外出土土器（第26図）

平安時代以降の遺構のみならず、攪乱によるとみられるが、縄文・弥生時代の遺構にも土師器、須恵器が

混入していた。しかし図示できるものは少ない。1、2は須恵器杯の底部、3は台付甕の脚部である。3は、外面に煤の付着が顕著である。

第26図 遺構外出土土器



遺構外出土平安時代遺物観察表（第26図）

番号	器種	口径	器高	底径	焼成	色調	残存率	整形、調整等
1	杯			(7.0)	優	灰	底部15	F区表土出土。須恵器。底部回転糸切り
2	杯			(6.0)	優	灰	底部20	F区表土出土。須恵器。底部回転糸切り
3	台付甕			(8.9)	優	灰黄	脚部30	B区出土。土師器。脚部内外；ヨコナデ

4. その他

(1) 溝跡

第1号溝跡<SD 1> (第27図)

位置は、B-2グリッドである。SK17を破壊している。

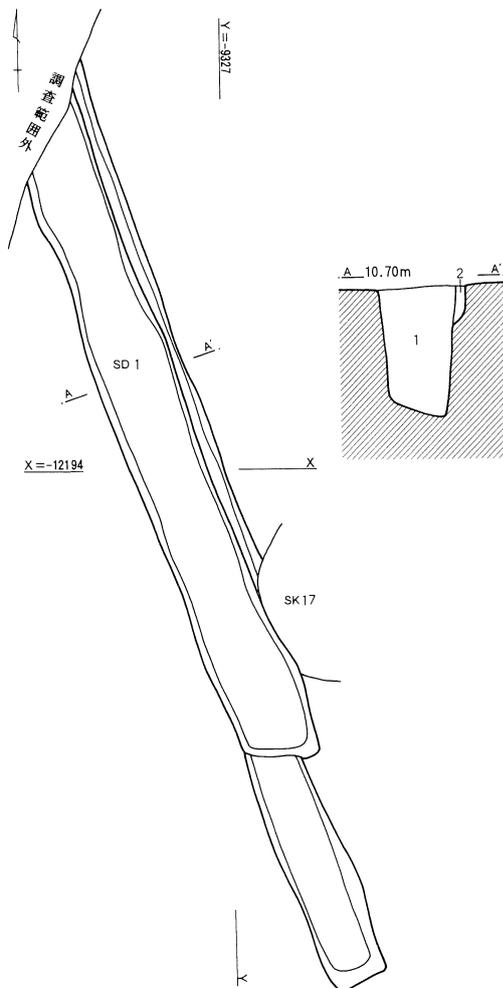
南端は検出されたが、北端は調査範囲外であるため全長は不明である。平面形はほぼ直線状で、主軸方向はN-10°-Wである。確認された延長は7.6m、幅0.7mである。側壁はほぼ直立し、断面形は直線的な箱型である。深さ1.1m。南端部約2mは一段浅く、深さ0.6m。東側面に深さ0.3mの段がつくが、土層断面図でも、それに対応する覆土の垂直的な境界が認められることから、2条の溝が重複した結果とみられる。形状

は溝だが、覆土は多量のロームブロックを含む単一層位であることから、掘削後、土砂が流入する間を置かず一気に埋め戻された可能性がある。

出土遺物は、土器、陶器の小片11点である。遺構の帰属時期は、近世以降と思われる。

なお、周辺に分布する長方形土壌は、いずれも主軸方位がSD 1と平行もしくは直交しており、これらは、同一の地割規制のもとで同時もしくは連続的に掘削された可能性が高い。調査区西側の攪乱群が、平面形、方位ともにやはりこれらに類似していることは、遺構の帰属時期が近・現代近くに降る可能性を示している。

第27図 第1号溝跡



SD 1

- 1 黒褐色土：ローム粒、ロームブロック（ $\phi 3\sim 10\text{mm}$ ）を多量に含む
- 2 黒褐色土：ローム粒、ロームブロック（ $\phi 3\sim 5\text{mm}$ ）を多量に含む

0 2m

(2) 土壙

第1号土壙<SK 1> (第29図)

位置は、B-2グリッドである。SK 2を壊している。平面形は長辺2.7m以上、短辺0.7mの長方形とみられ、深さ0.2mである。西・北側に段が廻る。

遺物は、土器、陶器の小片9点で、遺構の帰属時期は、近世以降である可能性が高い。

第2号土壙<SK 2> (第29図)

位置は、B-2グリッドである。SK 1に破壊されており、平面形は不明である。深さ0.1mである。

遺物はなく、遺構の帰属時期は、SK 1に先行するが不明である。

第3号土壙<SK 3> (第29図)

位置は、B-2グリッドである。重複するSK 17との先後関係は不明である。平面形は1.4×0.4mの長方形で、深さ0.1mである。

遺物は、弥生土器・土師器、陶器の小片5点で、遺構の帰属時期は、近世以降である可能性が高い。

第4号土壙<SK 4> (第29図)

位置は、D-1グリッドである。平面形は直径0.6mの円形で、深さ0.1mである。

遺物は、縄文土器、土師器の小片4点で、遺構の帰属時期は、平安時代以降と推定される。

第5号土壙<SK 5> (第29図)

位置は、D-2グリッドである。平面形は直径1.2mの円形で、深さ0.6mである。

遺物は、縄文土器、土師器、須恵器の小片10点で、遺構の帰属時期は平安時代以降と推定される。

第6号土壙<SK 6> (第29図)

位置は、E-1グリッドである。平面形は2.4×1.8mの不整形で、深さ0.1mである。

遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。

第9号土壙<SK 9 (旧 SK11)> (第29図)

位置は、D-1グリッドである。重複するP 4との先後関係は不明である。平面形は0.9×0.6mの楕円形で、断面形はV字形、深さ0.3mである。

遺物はチャート片が1点だが、遺構の帰属時期は、縄文時代である可能性がある。

第11号土壙<SK11 (旧 SK15)> (第28・29図)

位置は、D-3グリッドである。平面形は2.8×1.7mの方形で、深さ0.2mである。

遺物は、縄文土器、土師器、須恵器の小片25点で、遺構の帰属時期は、平安時代の可能性がある。

第12号土壙<SK12 (旧 SK16)> (第30図)

位置は、C・D-3グリッドである。平面形は直径0.8mのほぼ円形で、深さは0.2mである。

遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。

第13号土壙<SK13 (旧 SK17)> (第30図)

位置は、C-3グリッドである。平面形は0.8×0.7mの楕円形で、深さ0.1mである。

遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。

第14号土壙<SK14 (旧 SK18)> (第30図)

位置は、D-1グリッドである。重複するS J 3との先後関係は不明である。平面形は、0.8×0.6mの楕円形で、深さ0.2mである。

遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。

第15号土壙<SK15 (旧 SK19)> (第30図)

位置は、D-1グリッドである。S J 3を壊し、SK 16との先後関係、平面形は不明である。

遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。

第16号土壇<SK16 (旧 SK20)> (第30図)

位置は、D-1グリッドである。重複するS J 3、SK15との先後関係は不明である。平面形は楕円形とみられるが規模不明である。深さ0.1mである。

遺物は、土師器、須恵器の小片2点で、遺構の帰属時期は、平安時代以降である。

第17号土壇<SK17 (旧 SK21)> (第30図)

位置は、B-2グリッドである。SD1に壊され、SK3と重複するが、後者との先後関係は不明である。

平面形は、2.0×1.8mの楕円形で、深さ0.4mである。

遺物は土器小片2点、遺構の帰属時期は不明である。

第18号土壇<SK18 (旧 SK22)> (第30図)

位置は、B-1・B-2・C-1グリッドである。SK19・20・21との先後関係は不明。平面形は長方形で、長辺3.2m以上、短辺0.7m、深さ0.4mである。

遺物は、土器、陶磁器などの小片16点で、遺構の帰属時期は、近世以降である。

第19号土壇<SK19 (旧 SK23)> (第28・30図)

位置は、B-1・B-2・C-2グリッドである。SK18と重複するが、先後関係は不明である。平面形は2.8×0.8mの長方形で、深さ0.1mである。

遺物は、陶磁器などの小片7点で、遺構の帰属時期

は、近世以降である。

第20号土壇<SK20 (旧 SK24)> (第30図)

位置は、B-1グリッドである。SK18と重複するが、それらとの先後関係は不明である。平面形は2.1×0.6mの長方形で、深さ0.1mである。

遺物は須恵器の小片2点で、遺構の帰属時期は、平安時代以降である。

第21号土壇<SK21 (旧 SK25)> (第30図)

位置は、B・C-1グリッドである。SK18と重複するが、先後関係は不明である。平面形は長方形とみられるが、規模不明。深さ0.1mである。

遺物は土器小片2点、遺構の帰属時期は不明である。

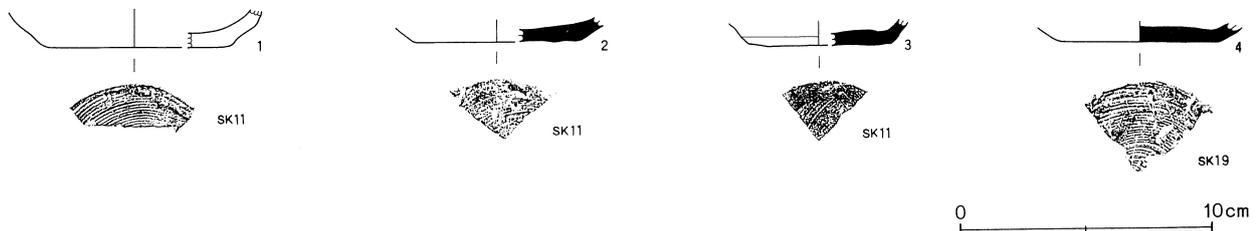
第22号土壇<SK22 (旧 SK26)> (第30図)

位置は、D-1グリッドである。平面形は直径0.9mの略円形で、深さ0.1mである。

遺物は、土師器小片など5点で、遺構の帰属時期は、平安時代以降である。

第23号土壇<SK23 (旧 SK27)> (第30図)

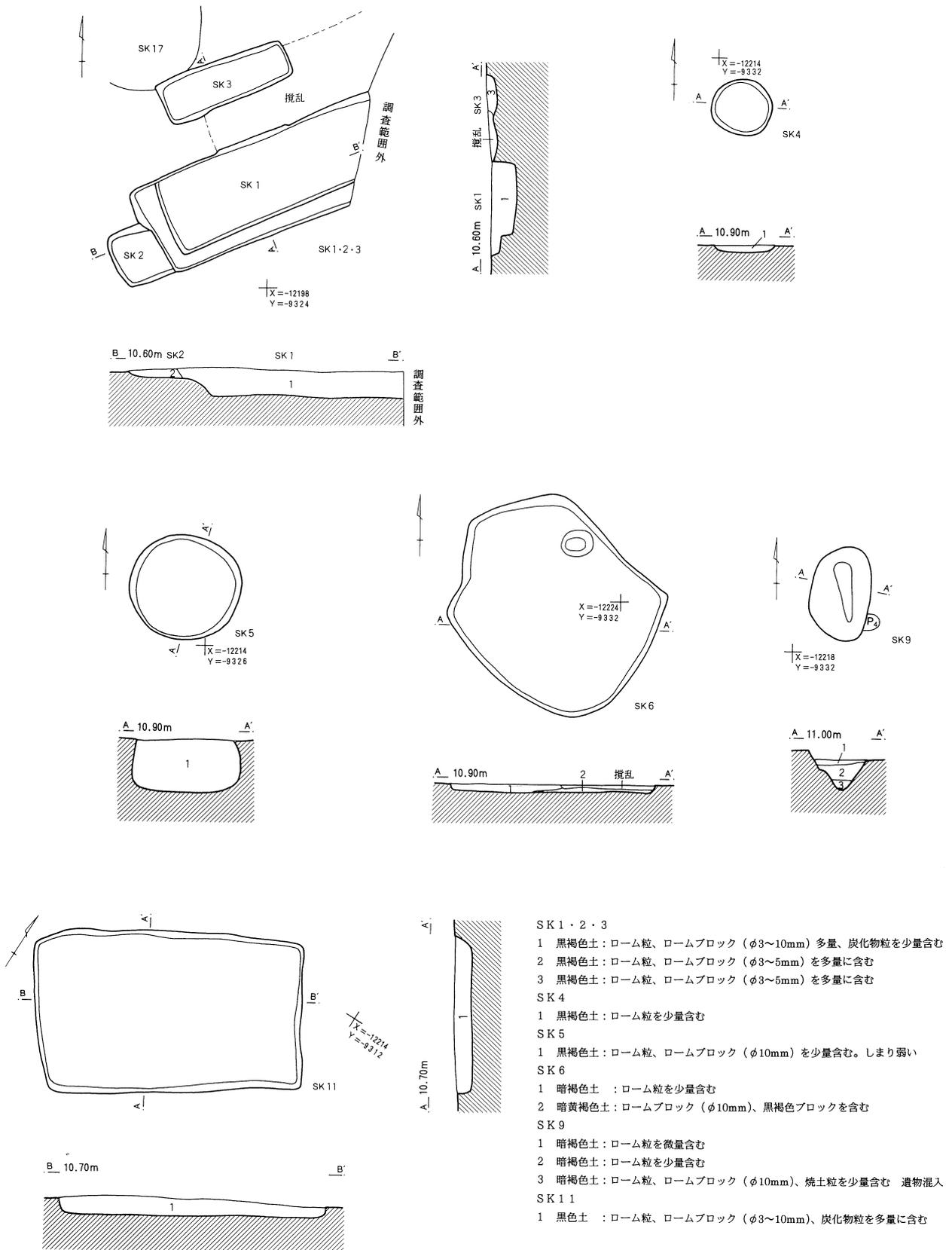
位置は、D-1グリッドである。平面形は直径0.7mの略円形で、深さ0.2mである。遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。



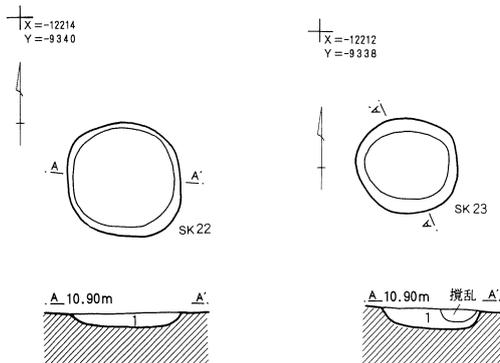
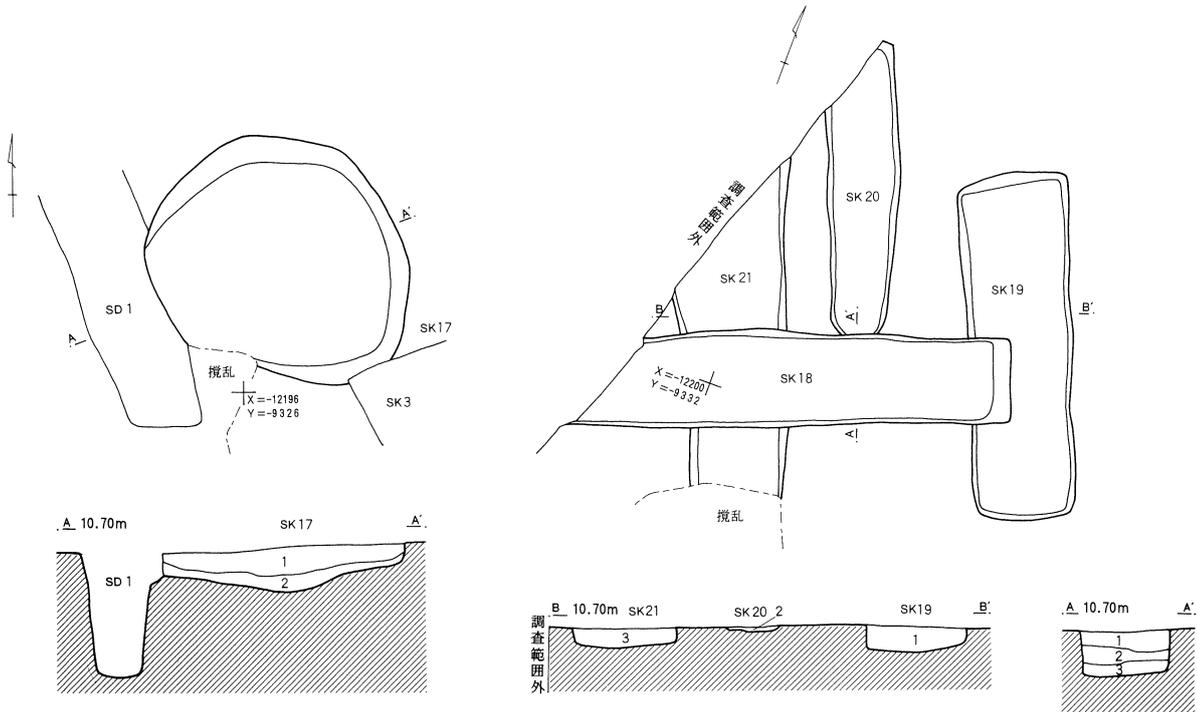
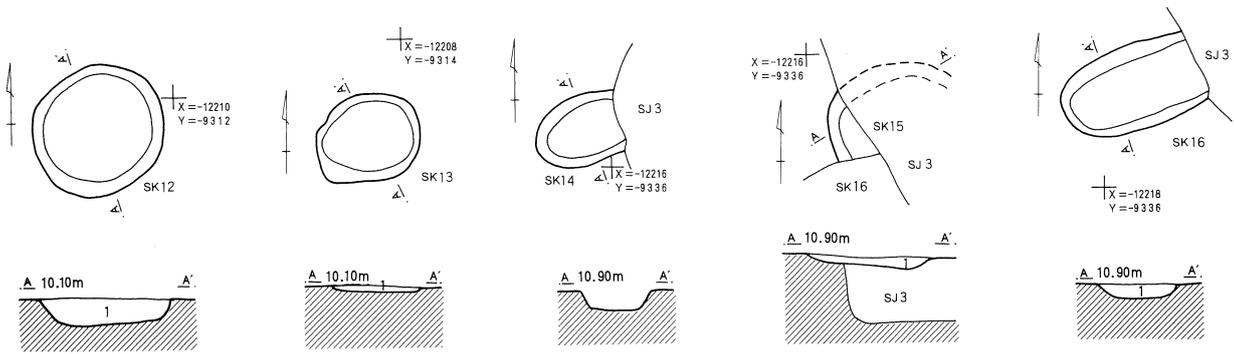
土壇出土遺物観察表 (第28図)

番号	器種	口径	器高	底径	焼成	色調	残存率	整形、調整等
1	杯			(6.9)	優	橙	底部25	SK11出土。土師器。底部回転糸切り
2	杯			(6.4)	優	灰黄	底部25	SK11出土。須恵器。底部回転糸切り
3	杯			(5.6)	優	暗灰黄	底部25	SK11出土。底部回転糸切り、周辺ヘラケズリ
4	杯			(6.3)	優	暗灰黄	底部25	SK19出土。須恵器。底部回転糸切り

第29図 土壌(I)



第30図 土壇(2)



- SK16
1 黒褐色土：ローム粒を少量含む
- SK17
1 黒褐色土：ローム粒、ロームブロック（ $\phi 3\sim 20\text{mm}$ ）を多量に含む。しまり弱い
2 黒色土：ローム粒、ロームブロック（ $\phi 3\sim 20\text{mm}$ ）を多量に含む。しまり強い
- SK18
1 褐色土：ローム粒、ロームブロック（ $\phi 3\sim 10\text{mm}$ ）を多量に含む
2 黒褐色土：ローム粒、ロームブロック（ $\phi 3\sim 5\text{mm}$ ）、炭化物粒を少量含む
3 暗褐色土：ロームブロック（ $\phi 3\sim 10\text{mm}$ ）多量、ローム粒、炭化物粒を少量含む
- SK19・20・21
1 黒褐色土：ローム粒、ロームブロック（ $\phi 3\sim 5\text{mm}$ ）を多量に含む
2 暗褐色土：ローム粒、ロームブロック（ $\phi 3\sim 5\text{mm}$ ）を少量含む
3 黒褐色土：ローム粒、ロームブロック（ $\phi 3\sim 5\text{mm}$ ）を多量に含む
- SK22
1 暗褐色土：ローム粒、ロームブロック（ $\phi 3\sim 4\text{mm}$ ）を多量に含む
- SK23
1 黒褐色土：ローム粒、炭化物粒を少量含む

- SK12
1 黒褐色土：ローム粒、ロームブロック（ $\phi 3\sim 5\text{mm}$ ）、焼土粒を少量含む
- SK13
1 黒褐色土：ローム粒、焼土粒を少量含む
- SK15
1 黒褐色土：ローム粒を少量含む



(3) 不明遺構

SX 1 (第31図)

位置は、D-2グリッドである。

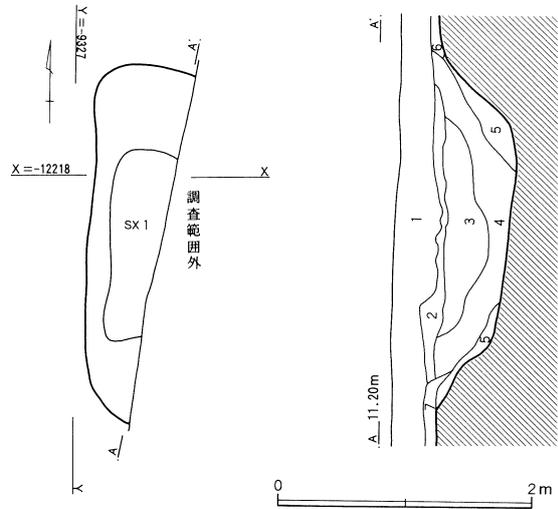
SJ 1の内部にあたり、その床面を壊して掘り込まれている。東半は未発掘であり、形状、規模は不明である。把握できた限りでは、南北長2.8m、深さ0.6mで、南北側面は緩やかに落ち込んでいる。

覆土の土層断面図によれば、基本的にはSJ 1の覆土である第6・7層を切り込んで掘削された状況が認められる。しかし壁面際の第5層は、第6・7層の下層にあたるように見え、この点を重視すれば、SJ 1に先行もしくは付属する遺構と、後出する遺構とが重複している可能性も認められる。

出土遺物は、縄文土器の小片が6点である。

遺構の帰属時期は不明である。

第31図 不明遺構



SX 1

- 1 暗褐色土 : 耕作土
- 2 暗黄褐色土 : ロームブロック (φ10mm) を少量含む
- 3 黄褐色土 : ローム粒、ロームブロック (φ10mm) を少量含む。遺物混入
- 4 暗褐色土 : ローム粒、焼土粒微量、ロームブロック (φ10mm)、黒褐色ブロックを少量含む
- 5 褐色土 : ロームブロック (φ10mm)、を少量含む
- 6 暗褐色土 : ロームブロック (φ10mm) を少量含む
- 7 褐色土 : ローム粒を少量含む

(4) 遺構外ピット

第1号ピット<P 1> (第32図)

位置は、E-1グリッドである。

平面形は直径0.3mの円形で、深さ0.15m。

出土遺物は、縄文土器の小片1点のみである。

遺構の帰属時期は不明である。

第2号ピット<P 2> (第32図)

位置は、E-1グリッドで、P 1に近接する。

平面形は0.4×0.3mの楕円形で、深さ0.1m。

出土遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。

第3号ピット<P 3> (第32図)

位置は、D-1グリッドで、SJ 1に接する。

平面形は直径0.2mの円形で、深さ0.1m。

出土遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。

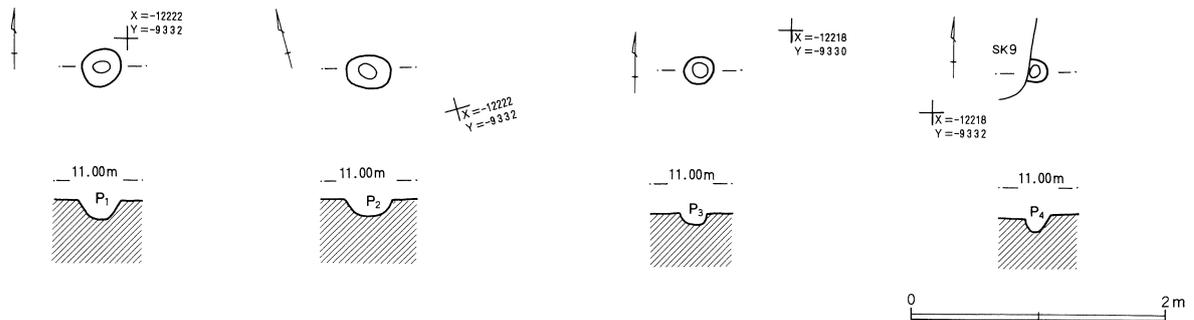
第4号ピット<P 4> (第32図)

位置は、D-1グリッドで、SK 9と重複するが、先後関係は不明である。

平面形は直径0.2mの円形で、深さ0.2m。

出土遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。

第32図 遺構外ピット



V 調査の成果

弥生時代後期の遺構、遺物について

(1) 出土土器の様相

今回の調査で検出された遺構、遺物は、縄文時代早期・中期、弥生時代後期、平安時代以降にわたっている。対象範囲は狭く、遺跡範囲のごく縁辺にあたる地点ではあったが、得られた成果は、分布調査等を通じて予想されていた複合遺跡としての様相を端的に示している。ここでは、そのうち、量的に主体をなす弥生時代後期の遺物、遺構に焦点を絞り、報告のまとめをしたい。

まず、出土土器の内容を通観する。掲載した遺物は、土器48点、石器2点、鉄器1点である。凶化可能なものは基本的に対象とした。

壺類は、折返し口縁壺(S J 3-2)、複合口縁壺(S J 3-1・3、S J 3-6、S J 4-5)、単純口縁壺(遺構外-1)が確認される。口径は20cm前後が主体で、器高は30cm前後とみられる。S J 3-6、S J 4-1・5が同一個体ならば、やはり口径は20cmを越える。縄文と棒状浮文で飾られた複合口縁壺は、類例を見渡すと比較的大型品が目立ち、また、古墳時代前期初頭に位置付けられる大宮市吉野原遺跡でも、分量、装飾性に变化なく存続している。東松山市駒堀遺跡11号住例のように、別な土器様式圏で見出されるものもある。付言すると、複合口縁壺は、古墳時代前期にかけて大型装飾壺が姿を消していく流れの中で、そのいわば伝統的性格を表現する形式として際立っている。

折返し口縁壺S J 3-2は、口縁内面が円形浮文と縄文で飾られる一方、外面はハケメ仕上げである。外面にハケメを残す壺は、周辺でも類例は散見されるが、より広域的には、ハケメ台付甕の主体的分布圏と重なるようだ。天竜川東岸地域の菊川式土器にその傾向が目立つ点は注意を要する。ハケメ仕上げを装飾性の後退とみなし、時間的後出要素と割り切ることはできない。単純口縁壺とみた遺構外-1も、口縁部が内湾する点に注目すれば、やはり菊川式土器との関連が見出

される。全形が知られる例として蓮田市西原遺跡46号住-1、同40号住-1があり、網目様捺糸文をもつものとしては、同グリッド-1が類例となる。

甕類で基本形態が確認できるものは、図示を見合わせた小破片を含めると、台付甕4、平底甕1の内訳である。出土土器全体で、鉢を除けば平底とわかる底部破片がみあたらない点からみて、台付甕の割合が本来的に高いと推定される。平底甕としたS J 6-2は、煮沸具としての使用痕跡が明瞭でない。口縁部の開きが小さく、キザミがない点も台付甕と異なっている。類例に岩槻市木曾良遺跡環濠-10があるが、出土した甕の中で唯一平底と確認された事情も一致する。形態に従い甕類に含めておくが、貯蔵具としての広頸壺である可能性がある。その場合、台付甕が煮沸具の主体となる傾向はより徹底したものとなる。

外面調整は、明瞭なハケ、板ナデなどである。口縁部のキザミには、U字形、V字形等くぼみの形状に差異が認められるが、それが外面調整の違いに対応するかは、残存部位が少ないため確認できなかった。S J 5炉付近からは、3個体いずれもナデ調整の破片が出土した。S J 5-3にみられる肩部の段と押圧文の意匠は、浦和市上野田西台遺跡23号A住-3など周辺にも類例はあるが、東京湾沿岸地帯のナデ甕と共通する。

高杯類は、確実なものは脚部破片2点である。S J 4-2のように、無文でミガキ赤彩仕上げされ、鉢と同様な碗状の杯部をもつものは大宮台地域に一般的である。脚部が失われていると鉢との区別が難しい。大宮市A-178号遺跡17号住-6のように、有稜高杯の影響が認められるものも少数ある。一方、S J 5-5にみられる裾部の折返し文様帯は、東京湾沿岸地帯の高杯に一般的である。遺構外-2も高杯である可能性があるが、S J 10-1のように鉢にも同形が認められる。S J 6-3・4は、同一個体の小型高杯である可能性がある。

鉢類は、浅い椀状のもの(S J 10-2)、半球状の胴部から口縁部が屈折して開くもの(S J 10-1)がある。大宮台地地域から比企丘陵地域にかけては、椀状の小型鉢は無文が多い。

以上、断片的ながら、装飾壺、ハケ・ナデ仕上げの台付甕、鉢形高杯、鉢で構成される内容が確認された。周辺には該期の集落が密に分布するが、土器の様相については、それらとの際立った相違は認められない。他地域との関連は、大宮台地地域の土器様相をみるに際して重要な視点である。ハケメ台付甕分布地帯に含まれる他地域との関連、菊川式土器の影響、ナデ調整甕の存在に係る東京湾岸諸地域との関連は、念頭に置く必要がある。付言すれば、小型鉢、高杯については、吉ヶ谷式土器を通して中部高地との関連がうかがえる。また、低地を挟んで向き合う旧下総・常陸地域とも無縁ではないだろう。大宮台地地域の地理的条件からみて、在地の土器様式に多方面との交流が反映されることは、いわば宿命である。

資料は一括性に乏しく、また住居跡どうしの重複も認められることから、一定の時間幅が見込まれる。しかし、編年上は、概ね弥生時代後期後半に位置付けられる。ほぼ同時期の遺跡として、木曾良遺跡、上野田西台遺跡、大宮市北袋遺跡、同市B-7号遺跡などが挙げられる。木曾良遺跡環濠出土土器は、旧尾張廻間式土器との対比が可能な高杯を含み、廻間I式4段階、旧大和庄内式古段階に併行するとみられる。下野田本村遺跡の資料には、小型器台、脚部が開く有稜小型高杯等明確な新来要素は認められなかったが、その下限は、環濠集落の解体、新来要素の強い土器群を伴う集落の出現等、古墳時代への転換からさほど遡らないと思われる。

(2) 集落構成について

今回の調査では、4軒の竪穴住居跡が完掘、5軒について一部が検出された。得られた情報は限られているが、他の集落遺跡とそれを比較しつつ、集落景観について考えてみたい。

まず遺構の平面規模だが、完掘によって床面積が確定されたのは、S J 2 (9.0㎡)、S J 3 (9.1㎡)、S J 4 (10.6㎡)、S J 6 (7.4㎡)である。S J 10は、南北の隅が調査範囲限界付近とすれば、東西に長く約13㎡である。さらに広くなる可能性は残る。S J 5・7・8・9は不明であるが、S J 5とS J 9については、平面形が他と極端に異ならないと仮定すると、10㎡前後である。以上まとめると、床面積10㎡前後の、小型住居が群の主体となる状況である。

平面形は、壁の長さの比、またその湾曲度などの基準から、隅丸で正方形に近いS J 2とS J 3、同じく長方形に近いS J 4とS J 10(?)、曲線的なS J 6、S J 5に形態分類される。

中心軸方向は、基本的に炉が北西寄りに配置され、出入り口は南東方向が意識されている。方向がより近似するのは、S J 2とS J 3、S J 4とS J 6、S J 5とS J 10、S J 8とS J 9である。

主柱穴とみられる掘り込みが確認されたのは、S J 5とS J 10のみである。

貼床は、遺構の重複により本来の状況が不明なS J 7を除き、いずれの住居跡でも確認された。掘り方の状況が明らかなものでは、床全体を掘り込み貼床にするものが多いが、S J 3とS J 6では、壁のまわりを掘り残し、一段高くしている。

次に、集落を構成した単位集団の存在を念頭に、より状況が明らかな事例と比較してみたい。時期、距離ともに下野田本村遺跡に近い好例は、上野田西台遺跡だろう。1単位集団に対応する竪穴住居跡群を「単位住居群」(石坂1993)と呼ぶと、21軒の竪穴住居跡は、複数の単位住居群を含んでいる(第33図)。土器に認められる新古相、二つに大別される住居跡の中心軸方向、そして配列などを手がかりにその抽出を試みると、①3・4・13・18号住、②21・23・25・30号住、③16・28・29号住、④27・33・35・36号住、⑤26・31・32・34号住、⑥8・24号住と推定される(註1)。

展開を簡潔に述べると、中期宮ノ台式期集落と分布が重なり、出入口が台地西縁に面する①が最古、以下、

順に、やはり西向きで①の東に位置する②、台地北縁を背に南向きの③と④、そして伴う土器からみても新しい⑤と⑥が最終段階にあたるだろう。③と④は、35号住を中心として共存した可能性がある。各群は、幅30~40mのゆるい弧状配列を基調とし、その前後にさらに1軒配置されるものもある。①、②は、遺構の規模に差はあるが、大型の住居を主体に構成され、③、④では小型が主体となり、また④では規模の格差が明瞭である。小型が主体となる状況は、⑤、⑥に引き継がれる。単位住居群は、配列形態の基調を保ちながら、小型住居が主流化する方向で、内部での規模格差を鮮明にしていったようだ。

貼床は、②の4軒で確認された。床全体をいったん掘り下げて貼床にしている。単位住居群で床構造を共有していたことになる。下野田本村遺跡では、いずれの住居跡も貼床であったが、そのうちS J 3とS J 6は、壁の周囲を一段高く掘り残す掘り方構造である。

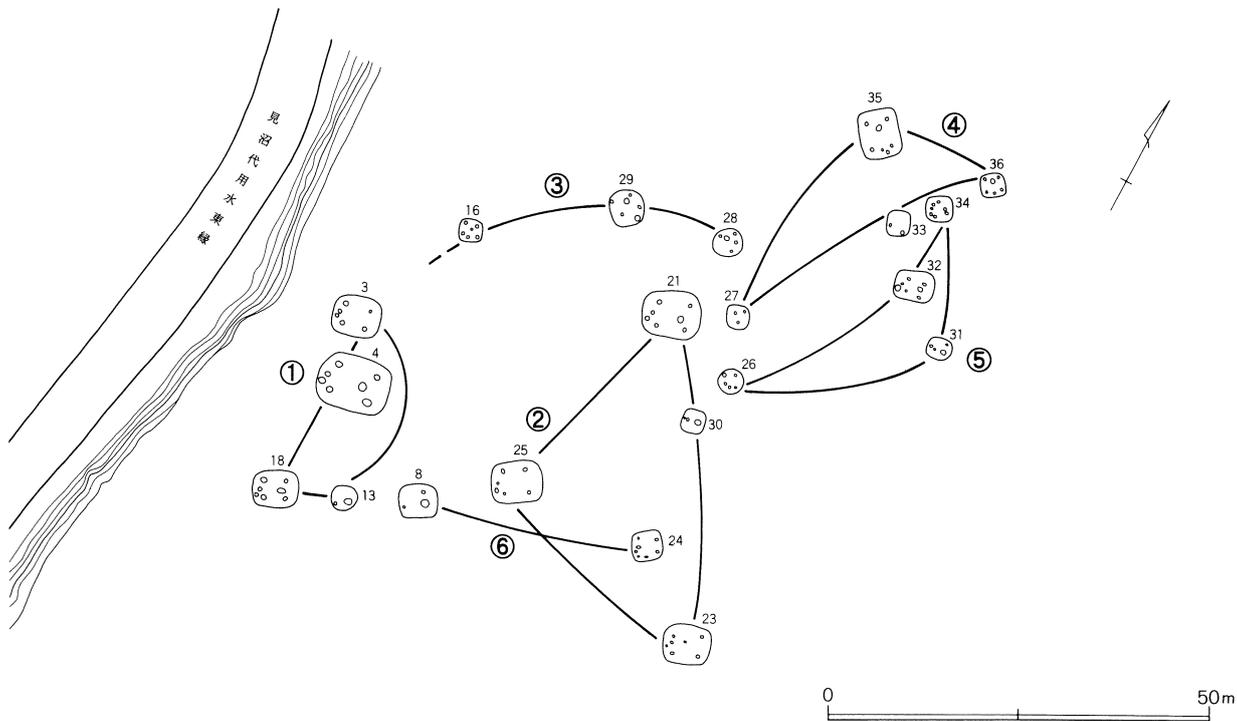
床面の構造は、素掘のもの（I型）と貼床に大別され、後者は、掘り方によって、床全面を掘り下げるも

の（II型）、壁に沿って周溝状に掘り下げ中央を島状に掘り残すもの（III型）、そして、逆に壁の周囲を掘り残すもの（IV型）に分けられる。さらに細分は可能だろうが、とりあえず置く。以下、記述の便宜上各括弧内の名称を用いるが、下野田本村遺跡ではI型とIV型、上野田西台遺跡ではI型とII型が確認されたことになる。

多数の竪穴住居跡が検出された事例について状況を確認すると、与野市札ノ辻遺跡では、少数の不明を除き、I型13軒、II型12、III型12、IV型10で比率は拮抗するが、同市須黒神社遺跡では、I型22、II型7、III型0、IV型11でI型優勢である。大宮市北袋遺跡では、報文での分類基準が異なるため直接的な比較が難しいが、I型1、その他28であり、逆にI型はごく少数である。

札ノ辻遺跡では、I型とIII型が調査範囲南縁に、IV型は中央付近に偏在する。I型の1・25・26・27・40・42・43・44号住と15・17・19・31号住、III型の28・34・35・36・38・41号住と45・50・52号住、IV型の54・55・

第33図 上野田西台遺跡の住居配列



61・67・73号住などの分布のまとまりは、単位住居群ごとに、貼床構造が共有された可能性を示している。それぞれのまとまりは、幅30～40mで、上野田西台遺跡で想定した単位住居群の規模に近い。また須黒神社遺跡では、IV型の11軒（8・16・17・20・21・23・27・29・36・37・44号住）が東西40mにわたり帯状に分布し、面的に分布するI型とは対照的である。重複、近接も顕著で、29号住、37号住、36号住の順に重複関係が確認されることから、変遷は3期ほどと推測される。貼床構造を共有する単位住居群が、ほぼ同位置で移動を重ねた結果とすれば、各群の広がり、やはり40mを越えていない（註2）。

下野田本村遺跡の場合、遺構の重複、近接を含んでおり、複数の単位住居群が重複しているといえる。小型の住居が主体となる状況は、上野田西台遺跡でも確認されたように、弥生時代後期後半から終末の状況を反映しているとみられ、土器の位置付けと矛盾しない。しかし群の中心的存在である大型住居は確認されていない。幅30～40mが単位住居群の標準的規模とすると、その広がり、調査範囲内に収まっていない可能性が高く、大型住居の有無を含め、単位住居群の全容には、なお不明な部分が多いと言わざるを得ない。

文献目録

石坂俊郎1993「大宮台地の弥生ムラー集落構成と住居形態の素描一」『史観』第128冊

小笠原好彦1989「古墳時代の竪穴住居集落にみる単位集団の移動」『国立歴史民俗博物館研究報告』第22集

尾形則敏1991「志木市田子山遺跡の弥生時代後期の事例について一田子山遺跡第31地点の弥生時代21号住居跡出土の資料一」『あらかわ』創刊号

村田健二他1998「木曾良遺跡の研究（1）一弥生時代の環濠集落を中心に一」『研究紀要』第14号

遺跡発掘調査報告書（五十音順）

浦和市遺跡調査会1987『上野田西台遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第73集

浦和市遺跡調査会1988『上野田西台遺跡（第4次）発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第108集

大宮市遺跡調査会1987『北袋遺跡』大宮市遺跡調査会報告 第19集

大宮市遺跡調査会1986『吉野原遺跡 下加南遺跡』大宮市遺跡調査会報告 別冊3

大宮市遺跡調査会1989『B-101号遺跡 B-7号遺跡』大宮市遺跡調査会報告 第28集

大宮市教育委員会1986『染谷遺跡群発掘調査報告』大宮市文化財調査報告 第20集

財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団1986『札之辻・小井戸』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第55集

財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団1986『須黒神社遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第56集

一方、中心軸方向、貼床構造などでは遺構間に共通が認められ、それが単位住居群を把握する手がかりとなることは、先の諸例からも認められる。遺構の重複が少なく、また規模、中心軸方向にもばらつきが少ない状況は、同じ単位集団が、集落構造をあまり変えず、ほぼ同位置に変遷を重複させた結果と考えたい。構造と移動の具体像を提示すべきところだが、遺跡内での資料の増加を待って今後委ねたい。

（註1）34号住は、報告書では古墳時代前期とされているが、あえて⑤に含めた。また、16号住の南に位置する10号住は、時期不明なため除いた。③に加わる可能性がある。ところで上野田西台遺跡の単位住居群については、以前にも分析を試みたことがある（石坂1993）。そこでは、遺構の中心軸方向を軽視したため、今回と異なる結果となっている。本稿で見解を改めたい。なお、中心軸方向の一致を過度に重視することもまた、誤りのもととなりかねまい。

（註2）小笠原好彦は、関東の古墳時代集落を対象に単位集団の移動を考察する中で、「単位集団の住居小群が占める空間は40m前後のものももっとも多い」ことを指摘している（小笠原1989）。

写真図版



B区全景(北から)



C区全景(北から)



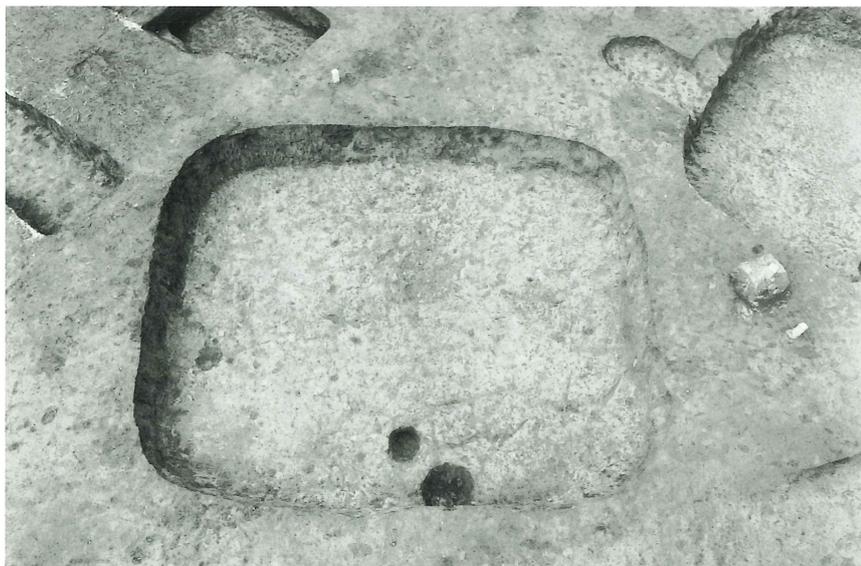
第1号住居跡



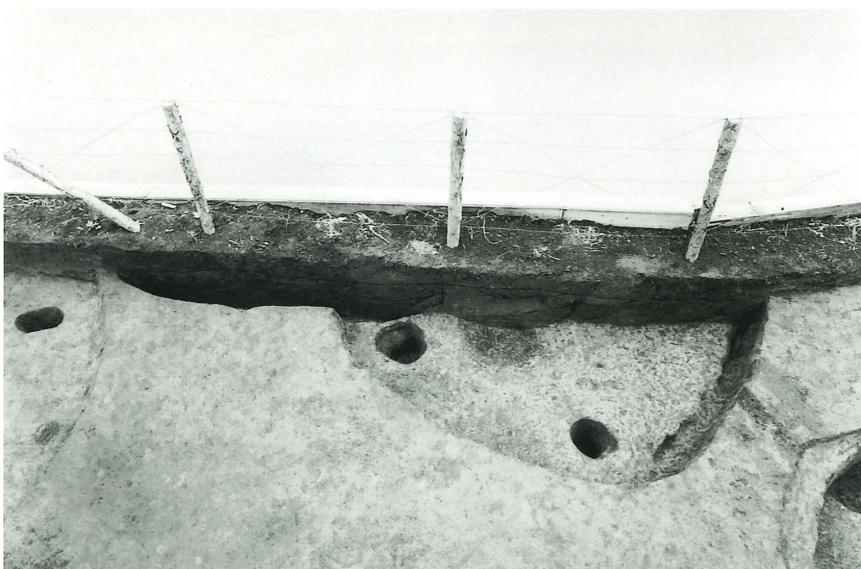
第2号住居跡



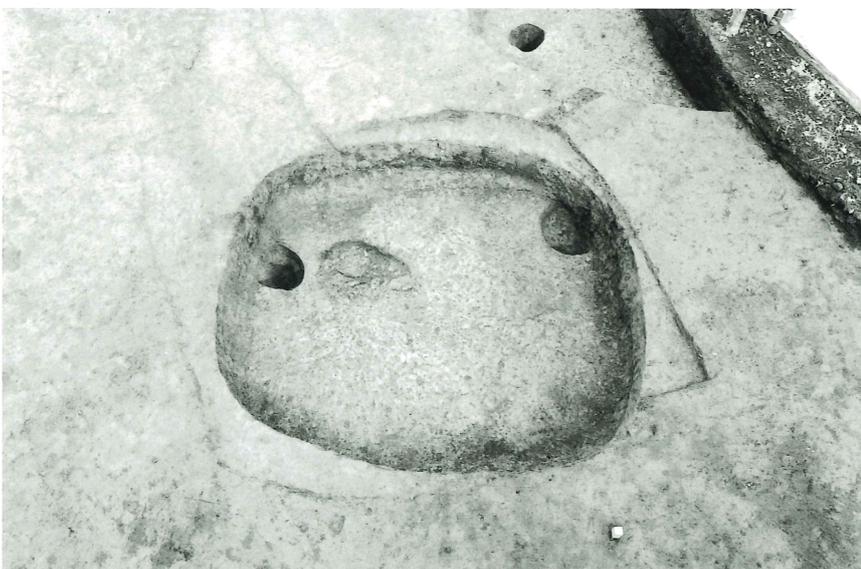
第3号住居跡



第 4 号住居跡



第 5 号住居跡



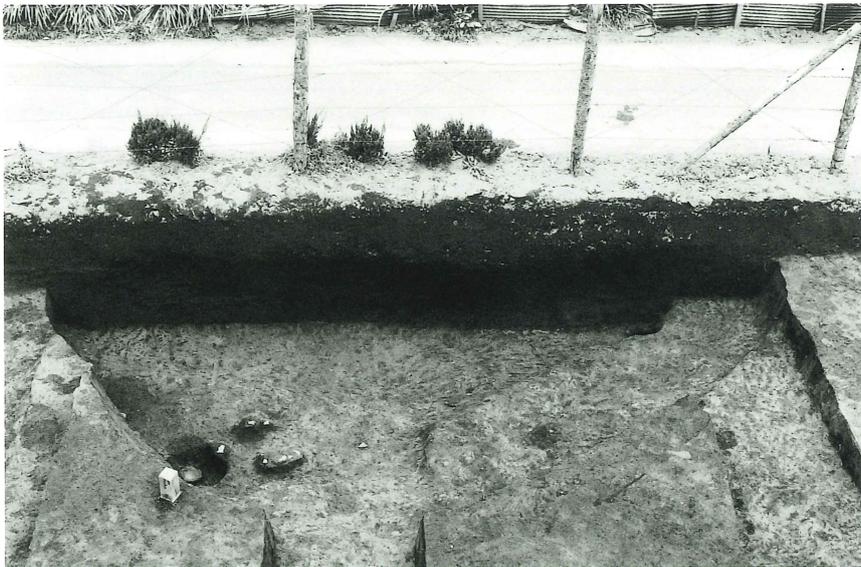
第 6 号住居跡



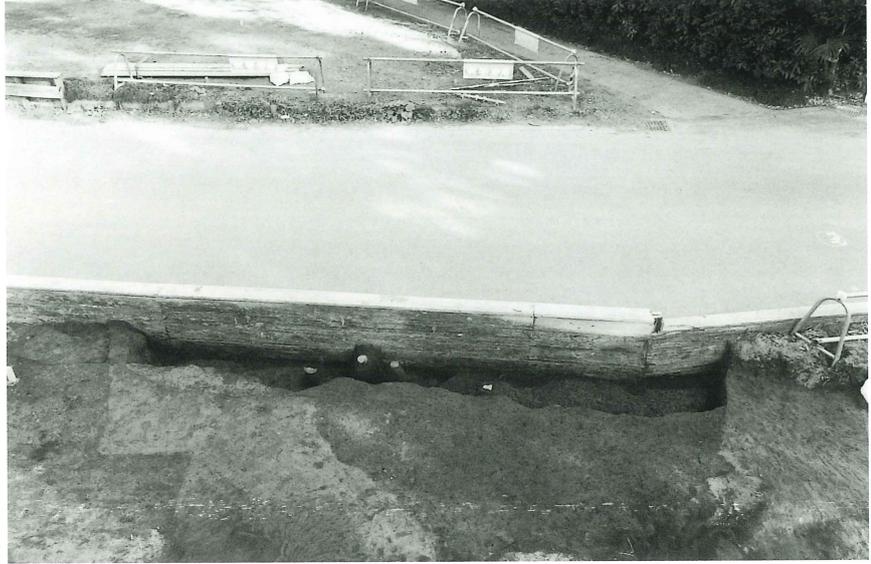
第 8 号住居跡



第 9 号住居跡



第 10・11 号住居跡



第5・7・12号住居跡



第1・2・3号土壇



第4号土壇



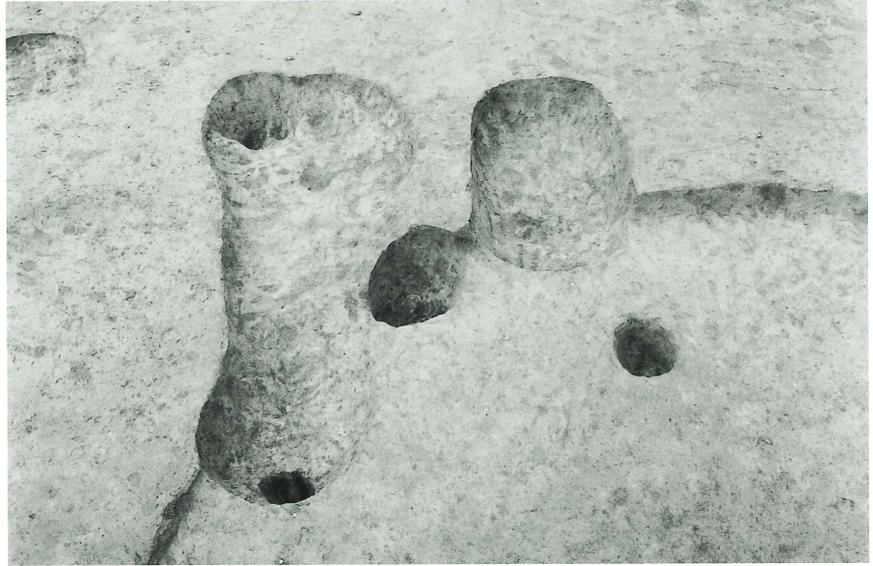
第 5 号土壤



第 6 号土壤



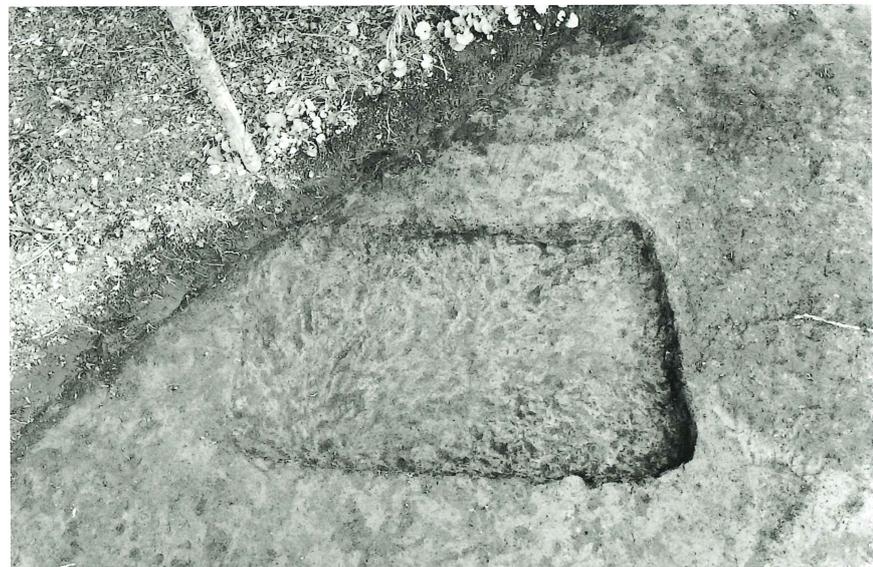
第 7 号土壤



第 8 · 10号土壤



第 9号土壤



第 11号土壤



第17号土壤・第1号溝跡



第18・19・20・21号土壤



第22号土壤



第3号住居跡(第13図) - 4



第3号住居跡(第13図) - 5



第5号住居跡(第16図) - 6



第6号住居跡(第18図) - 2



第6号住居跡(第18図) - 3



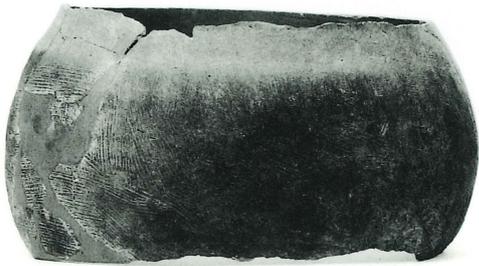
第6号住居跡(第18図) - 5



第10号住居跡(第23図) - 1



第10号住居跡(第23図) - 2



第10号住居跡(第23図) - 4



第10号住居跡(第23図) - 3



遺構外出土弥生土器(第24図) - 2



第12号住居跡(第25図) - 1



第12号住居跡(第25図) - 2



第12号住居跡(第25図) - 3



第12号住居跡(第25図) - 4



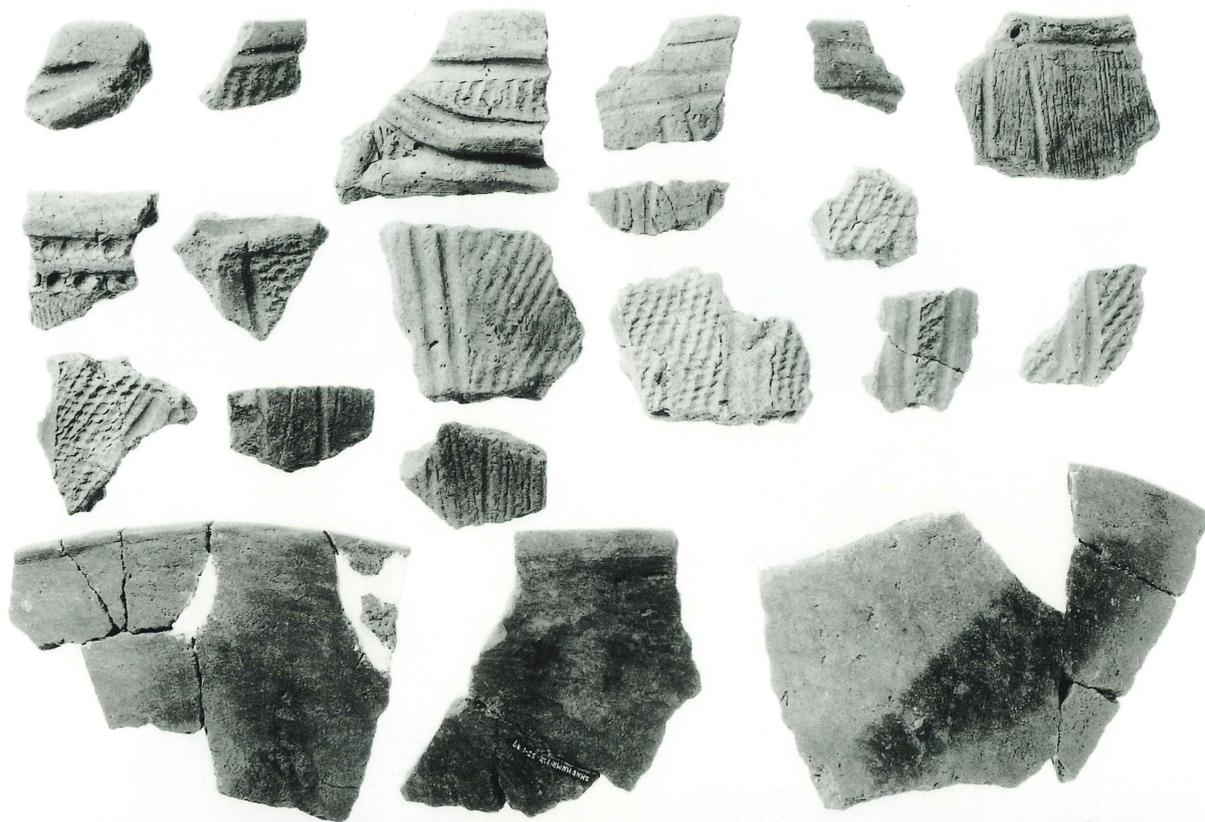
第12号住居跡(第25図) - 4



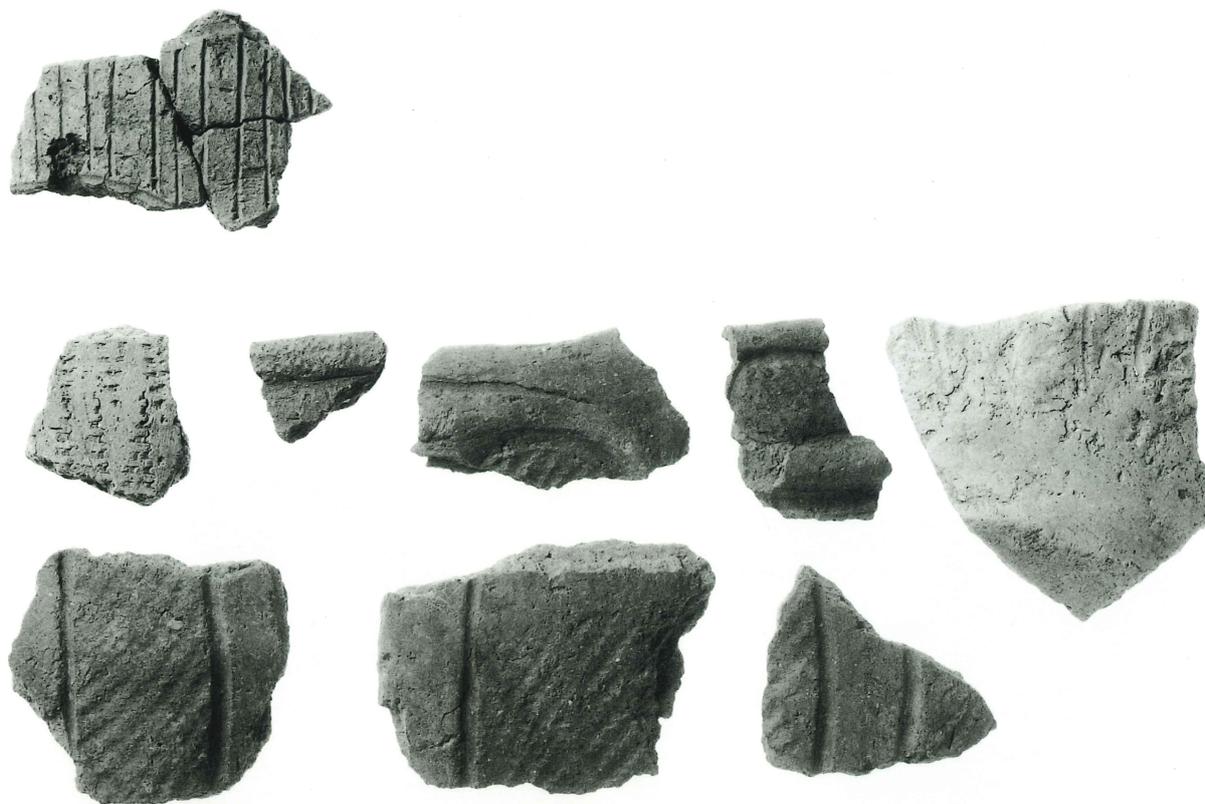
第12号住居跡(第25図) - 4



遺構外出土土師器(第26図) - 3



第1号住居跡出土遺物(第7図)



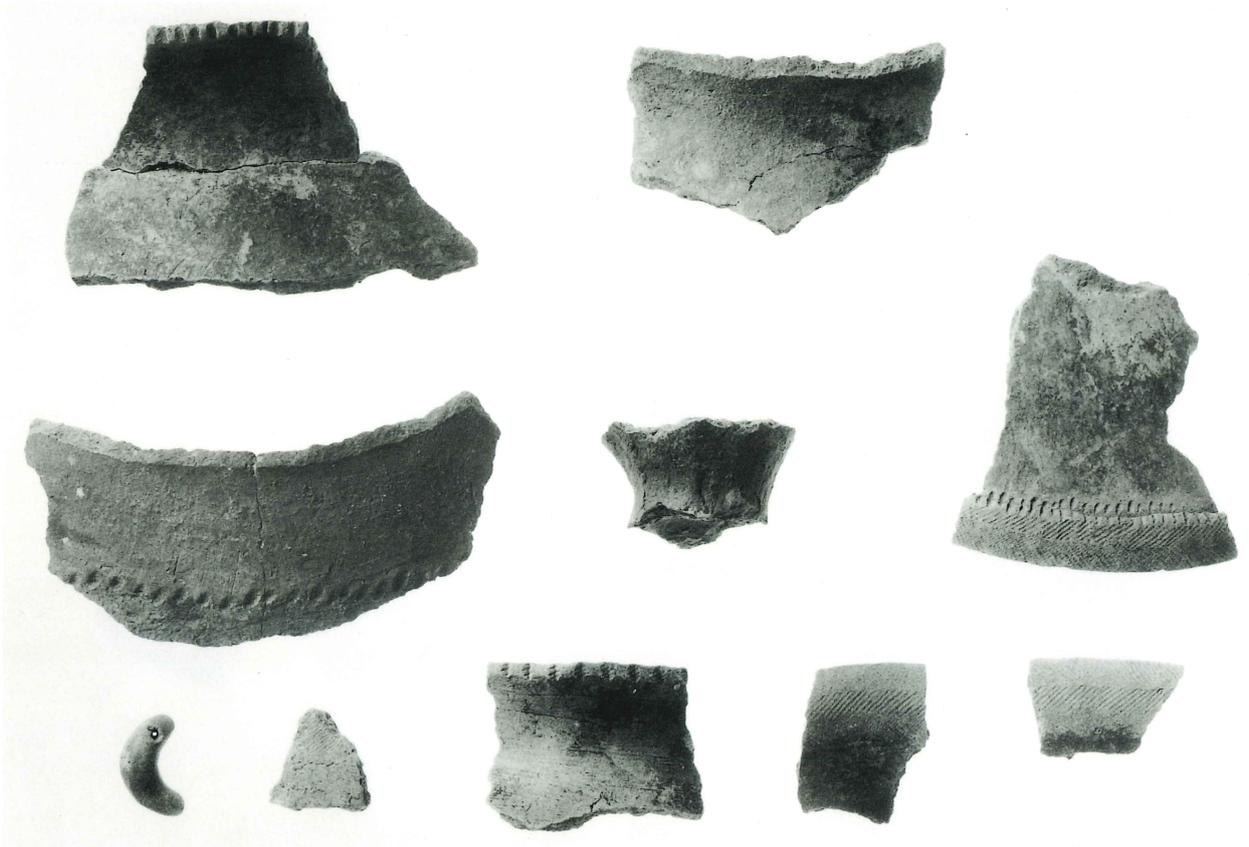
第1号炉跡・遺構外出土縄文土器(第8・9図)



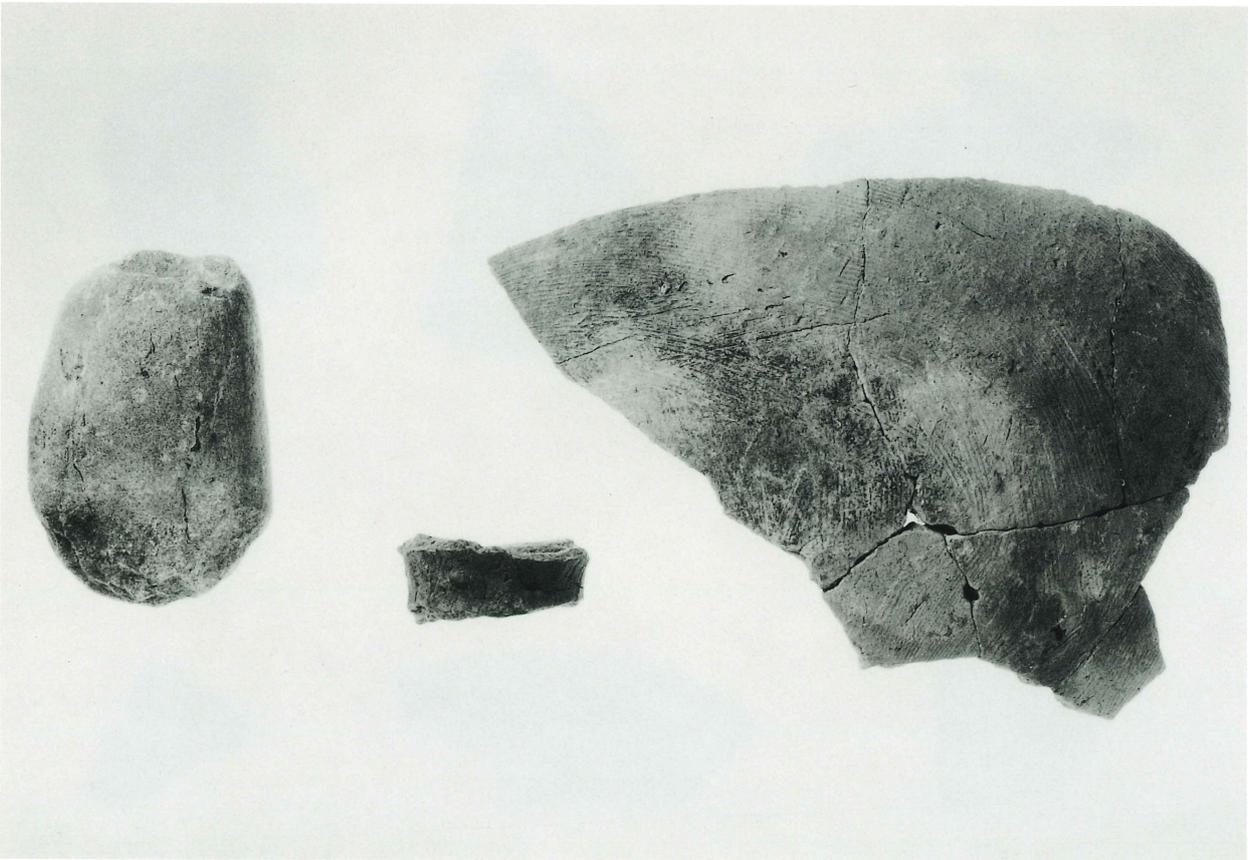
第 2 · 3 号住居跡出土遺物(第10 · 13図)



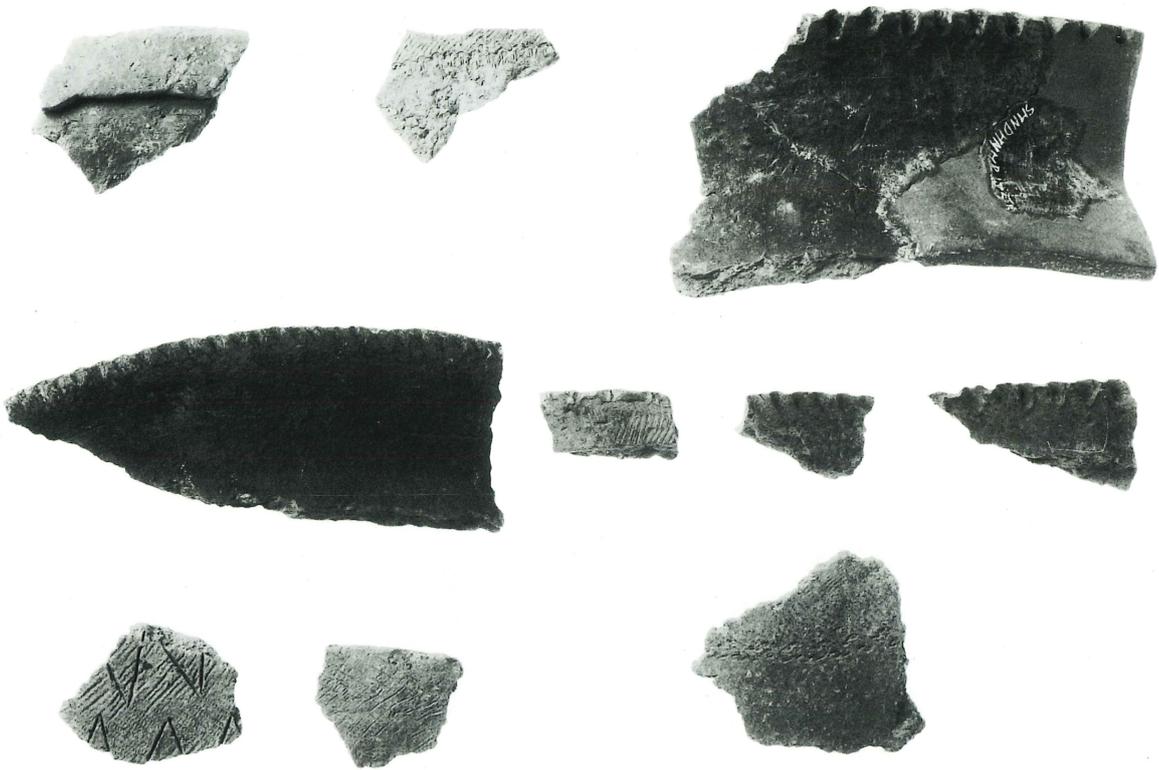
第 4 号住居跡出土遺物(第14図)



第 5 号住居跡出土遺物(第16図)



第 6 号住居跡出土遺物(第18図)



第9・10号住居跡出土遺物(第20・23図)



第12号住居跡出土遺物(第25図)



土壙・遺構外出土遺物(第24・26・28図)



第12号住居跡出土遺物(第25図) - 9

報 告 書 抄 録

ふりがな	しものだほんむらいせき							
書名	下野田本村遺跡							
副書名	埼玉高速鉄道建設事業関係埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第255集							
編著者名	石坂俊郎							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県大里郡大里村船木台4-4-1					TEL 0493-39-3955		
発行年月日	西暦1999 (平成11) 年7月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しものだほんむらいせき 下野田本村遺跡	さいたまけんうらわしのおおあぎ 埼玉県浦和市大字 しものだあぎほんむら 下野田字本村489 番地1他	11204	122	35° 53' 23"	139° 43' 48"	19981001 ~ 19981130	690	鉄道建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
下野田本村遺跡	集落跡	縄文時代早期 中期 弥生時代後期 平安時代		炉跡 2基 竪穴住居跡 2軒 竪穴住居跡 9軒 竪穴住居跡 1軒	縄文土器 弥生土器 土師器	土師器杯には墨書土器が含まれている。		

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第255集

浦和市

下野田本村遺跡

埼玉高速鉄道建設事業関係埋蔵文化財発掘調査報告

平成11年 7月22日 印刷

平成11年 7月31日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108 大里郡大里村船木台四丁目4番地1
電話 0493-39-3955

印刷／(株)太陽美術